



始



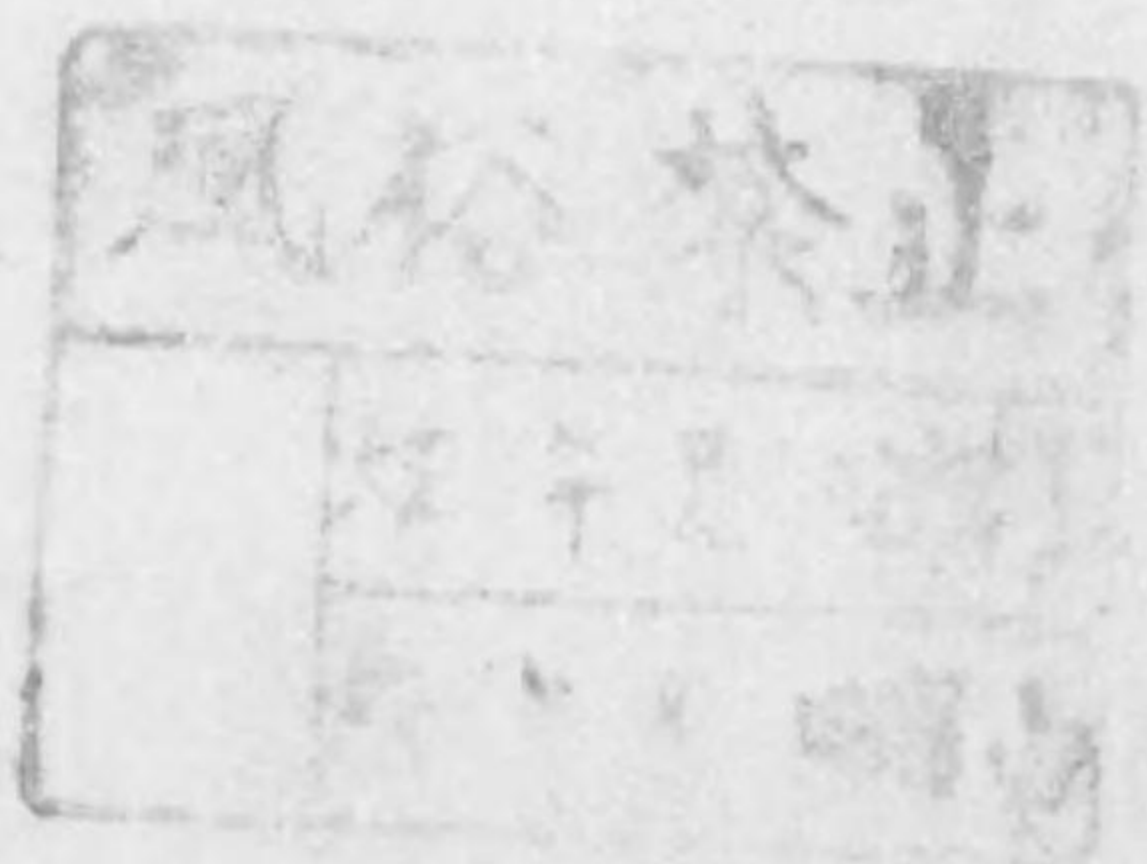
34

風俗禁止	
煙	酒
賭	博

函
風 117
號
永久保存

34

支那ニ浸ル人



井上紅梅著

特501
806



80W20094

自序

むらさきの南京を離れて水色の蘇州に來た。過去三年間南京に暮すうち、初一年は可成り興高きものがあつた。けれど後二年は無趣味な在來ありきたりとなつた。在來ありきたりが必ずしも無趣味といふわけではないが馴れては支那の南京も日本の東京も同じことで、四圍の人間の匂を悪臭として嗅がずにはゐられなかつた。私しが今度蘇州に移つて來たのは、も少し變つた支那の好い匂を聽きわけてみたいと思つたからである。

此本の初めに收めた二篇は、曾て(第一年)秦匯繁昌記と題して自

分のひとり雑誌「支那風俗」に載せたものである。次の一篇は前二篇の續稿で第二年の春までに書き上げたものである。當時わたしの希望は支那家庭内に入つて支那人同様に暮してみたかつたのである。希望は追々成就して秦匯畫舫録、四象橋日記の下宿生活を脱して葦素雜誌の純家庭生活に入つた。入つたかと思ふと早くも記録の筆を止めた。本來いふとその後の二個年こそ本統に支那に入聲となつた大切な時期であつたのだが、どうしたものか、遂に書く氣になれなかつた。それは一寸した詰らぬ感情から私しの感受機能に障害を來したのである。いづれ機を修理した上、書くつもりである。

俚謠管見は支那の俚謠と題して今年の「大毎新年號」に寄稿したものの、金陵の鳥は南京の鳥と題して上海の俳句同人雜誌「花雕」に寄せたもの、家と塔と橋は東京震災後の雑誌「我觀」に寄せたものである。爰に右三篇を加へて集録するに當り、大阪毎日新聞社、金風社、我觀社に謝す。

大正十三年十月

蘇州寓居にて

著

者

目次

奏滙畫舫錄	大正十年夏(一)
四象橋日記	大正十年秋(三)
葦素雜誌	大正十一年春(一〇)
俚謠管見	大正十二年冬(二四)
金陵の鳥	大正十一年秋(二五)
家と塔と橋	大正十一年秋(三五)

秦匯畫舫錄

卷之四
 全刻の点
 置製書具
 新集新譜
 四果書目
 卷之五
 目次

秦匯畫舫錄

夫子廟

壁に添ふて濁つた水がやわらかに流れてゐる。壁際に一本の楊柳がある。その亂暴に逆立つた枝の影に香煙のピラが見える。くすぶれた面に紅緑黄の配合である。河幅は十間そこくくだらふか、兩岸の家が低いので可成りそれを幅廣に見せてゐる。左手に六角三層の建物がある。福祿壽のあたまのような屋頂の寶輪が見える。それがいやに空に延び上つてゐるせいでもあらふ。間が抜けた感じを與へる。

これは文星閣と言つて夫子廟の附屬建物だが、寫眞のレンズによく這入る奴で最も秦匯氣分を發揮してゐるのである。

偕てこの閣の本體は初め朱塗であつたのだからだが、今は餘りに古びて何色と言つて可いか解からない。綠青地の金字額らしい物もあるが、注意して見ないと氣の付かぬ程荒れ果てゝゐる。そうして開放しの窓の内には建具などがゴタ／＼と置かれ、宛ら不用になつた芝居の大道具を此處へ運んで來て雨晒しにしてゐるやうな體裁である。この文星閣を前景として上手ほど好き川添ひに、南畫のような家並みが見え、凸字形の白壁が化粧瓦を戴いておちこちの屋根の間に聳立つ。その後ろには苔蒸した城壁のギザ／＼が夢見るようにとりまいて遙か向ふに紫金山が悠々どけむつてゐる。これだけ見てもモウ何とも言はれぬ。自分は今、文德橋のまんなかに立つて風に吹かれてゐるのである。大正十年六月末の夕暮に。

文德橋は鐵欄の反り橋で、下は木桁だ。僕の子供の時分、京橋から三かわめに並んでゐた彈正橋といふ橋がたぶんこんなものだつたように思はれる。この橋のそばに二階建の茶館がある。二階建と言つても橋の高さとスレ／＼のよ様な低いものである其

茶館で夕方から梨花大鼓といふものをやつてゐる。鈍い音で眠くなりそうな調子である。ヨカ／＼館屋の遠音のやうに

ドンツク、ドンツク、ドンンドン

ドンツク、ドンツク、ドンンドン

ドンンドンンドンンドンンドンンドン………

と際限もなく続く。歌曲は極く単調で、通常の言葉に少し艶をつけたといふほどのものである。否な艶といふよりも癖といふ位のものである。歌と平話の中間に在るものであらふ。平家琵琶のやうな古雅な點はないが、そのゆき方は同じやうな物と思はれる。名優譚鑫培は恁ういふ節までも通さず取り入れたと誰れやらが言つてゐた。

橋の上で東に向つて左側を見ると夫子廟がある。夫子廟の前は廣場になつてゐる。川添ひに彫刻した石の欄干が三十間ほども續いてゐる。大きな畫舫式の茶館船が三つほご岸に面して直角に据ね置きになつてゐる。此船の中には藝妓などの出入するもの

もある。又臨時に納涼演劇といふやうなものを掛けてゐるものもある。芝居は猫兒戲と言つて旅から旅へと渡つて歩く女役者の群れだ。お茶代は一般に六仙位だが、恁ういふ餘興をやつてゐる處では一毛錢と言つて十仙銀貨一枚を要求する外に小賤と言つて銅貨二枚位のポチを要求する。(現在南京では小銀一枚に對し銅貨十六枚の相場である)その代り熱湯で絞つた顔拭きを間斷無く持つて来て、茶碗に湯をしきりなしに注す。急須も用ゆるがたいは蓋付の茶碗に茶の葉を摘み込み、熱湯を時々注す事支那全體に同じである。

納涼芝居

芝居といふとスグ舞台面など聯想するだらうが、支那の猫兒戲は唯變つた着物(綺麗な衣裳といひたいが恁ういふ處のものはそうは言へない)を着て、役者は二人出ようが三人出ようが銘々自分勝手に教へられた通りの歌をうたつて聴客に聞かせるとい

ふ仕組みである。無論仕草や所作もあるが、ほんのお役目に向ひ合つて無理にからだを動かすといふギゴチない藝當である。顔の塗りかたなどは丸で土人形そのまゝのあくどさで惚れん／＼するところは少しもない。それでもイの音やアの音を屈折させて音量を示すところに至ると、聴客は好呀と言つて喝采する。そうして胡弓は『それ来たやれ来た』といふ調子で弾く。恰度日本の義太夫のサワリ趣味だ。あれほゞ色つぼくは無いい代りに熱も無い。ところが〇〇物になると又極端だ。帳を垂れ下げた寐台の内

でギイ／＼音をさせるなんていふ寫實がある、かと思ふと恰か指先にねばりついたよ

うな手付をしてチヨコ、アンツアンテ、トンシー、シエンモなどといふのがある。それは近頃お巡りさんが八釜しいので都會ではハヤらないさうだ。

支那の芝居の太鼓といふものは實に何ていふ固い音を出すものだらう、柏子木などは逆も及ばない。太鼓の直径は一尺五寸位あるけれども、肝腎の叩くところは中心一寸五分の胴空の處だ。好い芝居になると一日に三つ位、太鼓の皮を叩き破つて仕舞ふ。

カチ／＼カチ／＼カチ／＼カチ／＼あゝ何といふ騒々しいことだらう。それに銅鑼だ

チャン／＼チャン／＼とやるのは無闇に叩くのもなからうけれど、何しろ耳を刺激

すること夥しいので初めて聞くと頭がボーとなつて仕舞ふ。支那文でこれを現はすと

拍塔鎗鎗錢錢鎗鎗一令鎗である。そうして役者は錢錢錢の處から聲を出して樂器に合せるのである。むかし程長庚が陽春の白雪と言つて支那第一の高音を出した

うだが、そいふ人の爲めにこの樂器は作られたのだらう、と思はれる位である。丸

で火事場騒ぎだ。それに胡弓も馬鹿に高調子だ。だから猫兒戲の如き鍛錬の足りない

者は大底樂器に負かされて仕舞ふ。樂器に負かされて仕舞ふやうな役者は、テンから

駄目だといふ事になつてらしい。がモウ少しお静かにお願ひしたいものだ。樂器の

方を

支那芝居の衣裳といふものは何て又目まぐるしいものだらう。その刺戟の強い原色

を二種も三種も集めて金糸や銀糸でせゝこましい模様は矢鱈に織り出したり、縫ひ出

したりしてある。だから一見した丈けでは、ごういふ衣裳だかその概念さへ残らないだが好く見ると龍もあるし鳳凰もあるし牡丹もあるし、獅子や虎もあるといふやうな具合である。

但しだ、単純なものは又極端に単純だ。黒なら黒の一色だけ。米色なら米色の一色だけといふやうに。そうしてその分厚なフチ飾りが妙に支那味を現はしてゐるのである。(例令ば如意滾とか闊扁滾とかいふやうなもの)

偕てこの茶館船の停船してゐる岸には日本の縁日のやうな露店が晝間から出てゐる。あんまり景氣は好くないやうだけれど兎に角西瓜の切賣や、砂糖黍や、鉄など並べた道具屋、それから占者。煙草屋、茶茹での玉子、蓮の實の粥など賣つてゐるのである。眼鏡や、ドッコイ〜などもあるはずなんだが、いま此處では見あたらない。日本ならば鬼燈屋、オモチヤ屋、風鈴屋、簪屋、金魚屋、植木屋などがある筈なんだが、支那のは労働者本位らしい。その證據には煙草なども一本賣りをやる。腹が空いたから

一寸そこらで間に合はせになんか食つてみやうかといふやうな店ばかりである。この露店は二かわほど並んでゐて、通路より少し引込んだ處に牌樓が聳ね立つてゐる。そうして牌樓の下にはゴタ〜と人力車がたまつてゐる。

牌樓

牌樓は鳥居の種類であるが、もつとズツとこつてりした支那臭いものである。恰度花魁を裸體にしたら、あんな恰好になりやせぬかと思はるゝほど、あたまデツカチのものである。逆も自分の力では支へ切れないといふ調子で、丸太の突ツかい棒を四本ほど無造作に渡しにかけてある。形は品字形の頭に屋根を置き、サの字の脚でヒヨロ長く地面に突立つてゐるのである。詰り三枚の薄ッペラの額を示すために門の形を無理に作つて、複雑な木組みで屋根を支へてゐるのである。『天下文樞』の金字の浮彫も旨く書いてはあるが決して威嚴を示すものではない。何故こんな邪魔物を門前に建てゝ

置くのかと不思議に思つたが、或る夕暮、自分は此處に船を着けたことがある。すると
 前面に鶏血石のような門が微茫たる夕闇の空に聳立つてゐる。そうしてその後
 あまり高くもない木立などが見え、總門、二の門と屋根が層一層高まつて、いかにも
 殿堂といふべきガツチリしたものがしんがりしてゐる光景を見て、丸で夢殿の入口で
 はないか、と恍惚として仕舞つた事がある。支那の廟觀の一區劃には極めて賑やかな
 半面と極めて淋しい半面を保つてゐる。あゝ夕暮の夫子廟の森嚴さよ。柱の多い殿堂
 の中に金の位牌がピカ／＼と光つてる外に一物も無いガラド一の森嚴さよ。私は此印
 象を永久に胸に秘め置かう。

紅 燈 籠

餘り熱いから飯を食つてスグ宿屋を出た。七月なかばの六時、未だウンと明かるい
 から氣をゆるしてあちらこちらとさまよひ歩いた。廢墟のやうな一區劃を通り抜ける

と水邊に出た。家を圍んだキツタテの牆壁には皆窓がある。窓には瓦が透かしになつ
 て嵌め込んである。波形のやうなものや、穹崩しのやうなものや、雷紋形のやうなもの
 のや瓦を以て皆面白く細工がしてある。そうして内庭が微かに見透かされてゐる。そ
 うして牆壁が水につかつてゐる。あゝ何といふ好い氣持ちだらう。あの長閑な明笛の
 調べは子供のお守りをしてゐるような調子で、決して清歌一曲人を憂ひしむるような
 ものではない。それは崑曲の調べだ。私は此曲の調べを聞くと紅と緑と金銀であしら
 つた支那の嫁入道具を聯想してならない。そうして桃の紅と柳の緑か混絡らかつて
 ゐる中に西施のやうな美人が悠々と踊り戯れてゐるやうな氣持ちがする。少しの哀愁
 もない。亡國調などは餘程耳の感じの悪い奴が言ひ出したのだらう。自分はこんな
 事を思ひながら悠々と水邊を行き盡すと、忽ち黒い門があつた。紅紙に「紫氣東來」と
 書いて貼つてある。恰度その時二人の女が燈籠に火をつけて出て來た。未だ明るい
 に何の爲に火をつけてゐるだらふと訝りながら見てゐると若い方は一寸ふりかへつて

みてほゝゑみ、年取つた女の耳に口寄せ何か呟いた。すると年老つた女は、迂散らしく自分をみかへり至極無愛憎な顔してズン／＼行つて仕舞ふ。若い女は白い素絹の筒袖とツボンを着てゐたが、紅い燈籠の火がそれにうつつて何とも言はれぬ美しい片影をなしてゐる。白い靴下も水色の尖つた鞋もみな同じ光で華奢に暈されてゐる。彼女は折々火を見る、その横顔がふつくらして赤い。ちトツ毛みたいな軟いポー／＼毛が耳邊に一寸見えてゐる。それが微風にそよがれてゐるようなムツ痒ゆさを覺ゆる。自分には好奇心に驅られて此女の跡をズン／＼尾けて行つた。ゆき／＼の人も訝りながらみてゐた。臆てあちらこちらと曲つて、急にゴタ／＼したところへ出た。そこは利涉橋であつた。澤山の畫舫の中に彼女を待てゐたものが一艘あつた。紅燈籠は早速その畫舫の軒頭に掲げられた。野次馬はツイ／＼囃し立てた。

『出風頭、出風頭』

女は澄して船を出させた。白衣の女と紅燈籠を乗せた船はス／＼と東關頭の方に

向つた。涼しい夕暮だ。鳥だか蝙蝠だか低く水邊に飛ぶ。もう闇い。

桃葉渡

利涉橋は文徳橋から東北五六町離れて同じ漚水に跨つてゐる鐵欄の木橋である。これは晋の王献之が畫舫を艤して愛妾桃葉を迎接した桃葉渡のあとだそうだが後に金雲甫といふ人が橋を架し『渉るに便利だ』といふ意味でかういふ名をつけたのだそうだ。

桃葉復桃葉、渡江不用楫、但渡無所苦、我自迎接汝、
といふのが王献之の詩で

桃葉映紅花、無風自阿娜、春花映何限、感郎獨采我、
といふのが桃葉の詩だ。なんと可憐な返事ぢやないか、昔は好かつたなあ、とつくづく感心する。利涉橋のそばに北から流れ込む小河がある。これと漚水と合するところに今の桃葉渡がある。谷崎氏が吉原の大門みただと言つたのは漚清橋である。此

橋は釣魚巷への通路で、桃葉渡とは眼と鼻の間だ。

本来滙水は東關頭から流れ込んで来て青溪を受け、利涉橋を通過して交徳橋に向ふのである。けれど現在水量が多いので此關をピタリと閉め、紫金山の方から流れて来る青溪のみを申し受けてゐるのである。青溪は北から南に流れて東關頭で滙水に合し西に折れて利涉橋へ来るのである。秦滙畫舫の遊びは大底利涉橋から船に乗つて東關頭に至り青溪に入つて大中橋に溯り復成橋附近まで漕つけて了るのである。その間おほよそ一哩半位なものだらう、河幅は十間乃至十五間位である。但し利涉橋の處は妙にくびれてゐるから七八間位しかない。而かもそこが船着場となつてゐるので、その混雜は名狀すべからずだ。支那人は入り組んだ裝飾を好むと同時に又非常な混雜や雜踏を好むものと見ゆる。

畫舫

先づ畫舫の體裁だが、これは人を載せるよりも鸚鵡でも入れて置いたらよからうかと思はるゝやうに、入り組んだ格子や欄干が附いてゐる。その小さなものに至るとおもちやの船に乗つて悠々と遊ぶ氣分だ。又大きなものになると、五大力船ほどのがへがあり、支那のお座敷を水中に浮べたやうなものである。先づおもての方には可成り廣く板子が敷いてあつて、胴の間の入口には玄關のような建具がしつらひてある。すなはち正面の欄間には額を打ち、左右の格子飾りは菊花或は車輪式の透かし組み立てである。いづれ何とかいふ専門語があるのだらうけれど私には知らない。支那では恁ういふものを格眼と言つてゐるらしい。その格眼の前に屋蓋を三五尺位張り出して左右に欄杆がある。欄杆は日本で南京飾りと稱するものでダンペロを幾つも並べた形である。その欄杆に添ふて籐の安樂椅子が二つ或は四つ並べてある。偕てこの玄關

の屋根は大抵トタン葺で、ナポレオン帽子のやうな恰好で一段高くなつてゐる。簷端には如意形のギザ／＼が並んでゐる。天井からは六角燈が二つ、又は四つほど釣り下つてゐる。六角燈はガラス張りの石油燈で隅々に紅緑のふさを下げ、穴錢などぶら下げて置くものもある。又柱の上部に緑の植木鉢など釣つて置くものもある。

偕て胴の間は船の構造上、一段低くなつてゐるので、家根も従つて少し低く、ナポレオン帽子に大蒲鉾を繋いだ形である。此處は支那の客堂といふ装置で中央に方形のテーブルを置き白布を敷き、その上に脚附のビードロ皿や陶器の小皿などが程よく按排され料理を食つたり博奕を打つたりするために用ゐらる。そうして正面は一杯の破目板で仕切り鏡を取付け上に匾額を打ち左右に對聯あり。まんやかに小さな机が据ゑてあつてその兩側に寐轉んだり腰掛けたりする便あり。これを炕といふ。一體此處は阿片を吸ふための場所であるが、今は禁煙の世の中、人前では聊か遠慮して唯お茶を飲み西瓜子の種を嚼ちり、或は女とふざける位のことにはある。天井には大ランプがあ

り。笠の周圍に稜角レンズかビラ／＼してゐて夜は蟲除けのため寒冷紗の大袋など掛ける。そのほか簾もあるし日除けもある。舷上には例の欄杆があるといふ調子である。次に艙の方だが此處は別室になつてゐる。大きな船になるとコック場など設けてあるが、大抵は茶を入れたり手拭を絞つたり舵を操つたりする位の仕事場である。湯沸かしは實に妙なもので大藥罐のまんやかに煙筒があつて焔爐がイレコになつてゐる。極く小さな船になると臺所を省略してゐるから、湯は親船から貰ふ。

水榭水樓

自分は恁ういふ船に乗つて利涉橋畔から淮水の中流へとおし出されたのである。くつつきあつてゐる船の間を無理に通つて、そうして兩岸を見た。先づ北岸からいふと初ッ鼻は火巷といふ區域で家は皆平屋だ。そうしてこの家でも水中に礎石を置いて、スグその上に家組みをしたように水に親しんでゐる。水際には必ず欄杆がある。欄杆は

角つなぎ、喜の字崩し、ダンベロの行列などである。欄杆の内側に扉をしつらひたものもあるし、欄杆の上をスグ撥ね戸にして窓のように拵へたものもある。軒先や欄間はいろ／＼の木組で裝飾してある。屋頂は馬の鬣のやうに瓦を豎に置いたものもあるし或は分厚に漆喰を塗つて模様などを畫いた物もある。瓦は極めて薄く極めて多數置き並べてあるので遠くから見ると箒木目のやうな細い線である。處々に防火壁が角柱のやうに家と家とを區切つてゐる。

或る家は釣殿のやうなカツコーで水に突き出てゐる。或る家は鳥が雙翼を擴げたやうな家根を支へてゐる。其下に桃色の筒袖を着た娘が棕櫚の葉の團扇を手にして立つてゐる。その後には黒い蠟引の着物を着たお婆さんが笑つてゐる。

或る家の裏門には石段が設けてある。若い總髪そうはつの女が低い石段の上に濡れた衣類を置いて洗濯棒で頻りにそれを叩いてゐる。その側には船が泊つてゐる。船の上にはシヤツ一枚のハイカラ男が煙草を吸つてゐる。何をしたのか、急にその洗濯女は立つて側

にあつた柄箒木を把つて水に浸し男に向つて振りつけた。男は突差に飛び除いたので側にかゝんでゐた船頭の頭にシタ、カ飛沫が降りかゝり今度は船頭と女の大口論が初まつた。近處の張出し窓には四五人の男女がこれを見物して笑つてゐる。

或る家では大水の後で好くやるやうに子供が勾欄に出て水悪戯してゐる。又家の中から、釣竿を卸してゐる女の兒もあつた。十二三位の赤い糸で留めた辮子頭のチヨコ／＼とした鼠のやうな可愛らしさを感じた。

又或る家では見通しの大廣間を設け、そこに澤山のテーブルを据ゑ、大勢茶を飲んでゐる。肥れた中老の男が衆人の面前に立つて頻りに何か喋舌つてゐたが、聽て河の方に向つて歌のやうな調子で大聲を張り上げた。悲歌慷慨する人ぢやないかと思つた。狂人ぢやないかと思つた。

『あれは何です。發狂したのですか』
と同乗の黄さんに訊くと

「いわ、そうぢやありません、芝居に夢中になつてゐる人です。お國にもそういふ人がありませんよ」

と反問した。なるほど支那人は呑氣だ、あゝいふ中老が何も考へずに子供のようになく遊んでゐられるものだ。恐らく息子や孫が何處かで見つゐるかもしれない。丸で袁世凱にチャン／＼コを着たような立派なお爺さんであるのに。

南岸の方には二階建の家が多い。白壁の牆壁を廻らした上に物見櫓のやうな小樓がある。楊柳樓臺といふ額が見ゐる。

「水榭といふのが、水に張り出した平屋で、水樓といふのが恁ういふ風の二階家です」

と黄さんは説明した。この邊南北凡べて遊女町であるから大概の家は河から見通しの處に寢台を据ゑ、白い帳だの赤い夜具がチラホラと見ゐる。或はガラ／＼とバクチをやつてゐる者もあるし、或は素肌そのまゝのやうな薄い着物を着て椅子の上に片膝曲げ、

欄杆に腕を組み掛け、船の往來を二階から見下してゐる別嬪もある。そうしてその女は子供のやうな華奢な體格で、たいてい額に前髪を下げ眉間に赤い線が勻つてゐるところがある。時に依ると櫻桃のやうな唇を顔はして

『サーンニヤーン』

といふたぐゐの剃刀に蜜を塗つたやうな聲を出す。黄さんは南京の産れで年五十、三十年間秦淮花柳界で遊んで暮し此邊で誰れ一人知らぬ者はないといふ位な通人。道理で先程から此船のゆくところ、あちらでもこちらでも剃刀の甘露が降つて来る。黄さんはその度毎に聲の出場所を見やつて楽しそうに、にこ／＼し乍ら首を豎に打ち振つてゐる。

滙水無情

軒は曲つて瓦は落ち、あばら骨のやうな屋體をあらわした家の内にも美人はゐる。

それが皆な單色の輕装で尤もめかしこんだよそ行きなんだが一見、シヤツ猿股だけで出て来たような體裁である。支那の女は人間とは思へない。鸚鵡の精とか牡丹の精とか或は若い女の靈魂が末の世までも残つて秦匯の水でお化粧してゐるようにも見られる。

「今の女は貴方に向つて何と言つたのです」

と突然自分は黄さんに聞いてみた。

「あれですか、あれは」

と黄さんは一寸考へて聲を低め

「貴方は暫く見ないが、ごうかなさいましたか。お歸りにおよんなさいと、言つたのです」

「そうですか、僕はおこつてゐるのかと思つた」

「わゝ、慥かに少しは怒つてゐます。暫く行つてやらないから」

と彼は目を細めながら笑つた。歸りに行つてやらふと思つてゐらしい。こゝういふ人の好いお爺さんから常に小遣錢をせしめて、若い男に入れ上げてゐる女もあるのだらう。黄さんは何と感じたか、突然嘆息して

「匯水無情です。そゝういふ塔を此附近に建てゝみたいと思ふ」

と獨言のやうに言つた。

「何故です」

「さあ、三十年間も遊んでみましたが、一人として末を全うした女はありません。詰らぬものですなあ、何處も彼處も皆腐敗してをります。あのさまを御覽なさい。昔の文人は決してこんな遊び方をしなかつたらうに」

「でも壞れかゝつた家に平氣で棲んでゐるのが面白いちやありませんか。然かもお化粧して何の苦勞も無さそゝうに笑ひ戯れて。こんな暢んびりした氣分は日本では到底得られません、いゝなあ」

どつく／＼そう思つて自分はあたりを見廻はすと

『そうですか、そんなに好う御座んすか。全く物が安いのは日本よりも可いかも知れないが、これぢや本當に心細う御座いますよ。國を擧げて遊んでゐるような氣持ちがするから、そうしてごんなにならうとも構はずに』

『だけれど遊ぶやうに出來てゐる處だから遊ぶより外、仕方がないぢやありませんか』

『そうです、そうです。けふは大に遊びましょう』

と黄さんはスグ又賛成した。

むかし杜牧といふ男が商女は知らず亡國の恨とか言つて自分丈け大に解つた顔してその癖やつぱり耽溺してゐたが、そつといふ種類の人間が今でも支那には多いやうだ。何事も不平らしいやうな事を言つてみる。併し何事も已れは實行しないで遊んでゐる結構なこつた。秦匯はあの時分からそつといふ人間が満ち満ちてゐたのだらうと思ふと

愈々面白くなる。

行手には箱のやうな高い城壁の一部が見える。灌木や雑草で青々と時代が附いてゐて、逆も人間が拵へたものとは思はれぬほど古びたものである。

『あれは何ですか』

『東關頭です。あれから秦匯の水が堰入れられるのですが今は塞いであります』

一體支那には出來立てのホヤ／＼のやうなものは一向見當らない。無論あるんだ。あつてもそれが一向引立たない。いつの世でも懐古とか亡國の恨とか言ふやうな事を言つてゐるが、そつといふものでなければ人の注意を引かないやうに出來上つてゐる土地なのかも知れない。風土のせいだか、氣候のせいだか知れないが支那にゐると不思議にそつなつて仕舞ふ。一つは建築物の手入れを怠るせいかも知れない。如何に新事業に身を入れても煙筒が古塔のようになつて仕舞つたらごうだらふ。随分人間が餘つてブラ／＼してゐるのだから個人々々の家でももう少しキレイに掃除しそつなものだ

が、そうもゆかぬらしい。面白い國だ。こんな事を考へてゐる中に河はいつのまにか曲つて船は北の方に上つてゆく。右に屋背を尖腕ぎ取つたような通濟門の城樓が聳立つ。家をウンと脊負つて立つた大中橋が見ゆる。遙かに紫の小筑波が見ゆる。

『あれが紫金山ですよ。水はあの方面から皆流れて來るのです』
と黄さんはその空をゆびさした。

大 中 橋

初め大中橋は通行の出來ぬ橋だと思つてゐた。然るに或日そこを逆つて見ると、まんなかにチャンと道路があり。人力車でも馬車でもごうやら通行が出來、左右の家は奥行が極く狭いが饅飽屋、飯屋、菓子屋、鍛冶屋などといふ種類の店に人がウンと群がつてゐる。うか／＼すると橋とは思はず道路の一部分と見て通過して仕舞ひそんな處である。大中橋は三つ眼鏡の石造ではあるが恁ういふ重い物を平氣で支持してゐる

方は偉いものである。殊に絶間無しにその下を通行する船頭の竿先を受けるだけでも石垣が崩れそうなのだ。

『昔の建築は丈夫なものですね』

と黄さんが指示する方向を見ると乾隆何年とかいふ石瓦がアーチの下方に挟まつてゐた。

大中橋を潜り抜けると風景は一變する。右手の方に京都のインクラインの動物園みたいな鐵柵の外圍ひがある。潤さ一町位、或はもつとあるかも知れない。柳やアカシヤの木立が奥深く繁つて二つばかり支那式水榭が水に臨んでゐる。何に用ゆる建物だか知れないが此熱いのにガラス戸をピタリと閉めて簾を隙間なく卸してある。

『これが圖書館ですよ。今度藝妓を連れて遊びに行きませうか』
なるほど恁ういふ處では本は落着いて讀めまい。外ではドンチャン、ドンチャンと年中浮かれてゐるのだから、藝妓を連れて遊びにゆく位が至當であらふ。

又左手の方には何家花園とか言ひそな潤い庭園を控いた別荘風の家が多い。そうして或る一部分には茶館を設けて人を寄せてゐるものもある。涼み場所として以て來いのように蟬も鳴いてゐるし青葉の繁りもある。向ふの水の中に柳の大樹が行列してゐる。そういふ涼しい影に七八艘の畫舫が舳を並べて陸しそくに纜つてゐる。畫舫と畫舫の間には猪牙船のやうな小さい物賣船が柄付の鈴を鳴して忙しげに往復してゐる。煙草、菓子、ビール、ラムチ、おもちやなどを賣つてゐるのである。黄さんは此船の一つを呼び寄せて西瓜とビールとヤツチンコなど買った。麥酒は天津製のフワイプスターと言つて泡が無暗に立つ奴である。鴨尖肝は鴨の肝を干し固めたもので少し鹽氣がある、中々旨いものだ。

賣船の外に藝妓を乗せて來る小船がある。番小屋のやうな甚だ殺風景な木の圍ひがしてある船である。それでも絹の靴下で緊張した足をなげ出した別嬪の顔が見ると此番小屋も引立つて來る。雙福堂だの迎仙別墅などといふ看板が一々掛つてゐる。こ

れを局船と言つてゐる。

歌 賣 船

外に面白い船がある。それは藝妓の船と違つて古びた小畫舫だ。丸で押し掛け女房のやうに畫舫に漕ぎつけて來て歌をうたふのである。餘り上等でない一家族が乗つてゐる。一家族は皆藝人で胡弓を弾いたり太鼓を打つたりする。そうして船首には若い娘が作り附けのやうになつて腰掛けてゐる。我々を見てにつこり笑ふ。歌をうたはせて貰ひたいのだらう。

『やらせてみましようか』

といふ間もなくその船はズン／＼漕ぎ寄せて來て、自分の前に過去帳のやうなものを突き出し何か頻りに懇願する。

『およしなさい。まづいから』

『いくらです』

『二十仙です』

『そんなら可いぢやありませんか』

と過去帳を手に取つてみると天水關、空城計といふ種類の芝居歌が記してある。自分分は三娘教子といふ手ほごきのやうな歌を彼に命じると、なるほどマツい。上海の女と較べると丸で人種が違ふやうな低い聲を出す。

『どうしてこんなに聲が低いのでしよう。そうしてちつとも旨味がない。あんまりピン／＼されても困るが、これではチトひどすぎる』

『揚州人は一般に歌がまづいやうです』

我々はこんな話をしてゐたか女は一向平氣でズン／＼やつてのけ二十仙受け入れてもう一曲やらせて呉れと頼む。

『小調をやらせてみたらどうです』

『何をやらせても駄目です』

とトウ／＼歌船は落第した。

船が復成橋に近づいた頃には西の空に美しい夕焼を見た。あたりは廣々としてゐる。空地には螢の棲みそうな叢があつてその端れに、倉庫のような建物が窓も無しに黙々として頑張つてゐる。來し方は皆けむつて畫舫は三々五々と遠く離れてゐる。片側の塀の内には半裸體の男が晒しのやうな丈け長き白布をセツセと取り込んでゐる。船は一轉して石門に着いた。復成橋は穹窿が低いので畫舫はこれより前きは一步も通行することが出來ない。我々は此處から上陸して橋の上に登つた。橋の裏側は又更に好い景色である。

涼しい青葉に圍まれた大きな御殿風の屋根が見ゆる。氣の利いた亭、榭が屈折した壁に連なつて水中に突き出てゐる。水門もある。階段もある。灌木は水草と親しんで遠く上流を暈してゐる。丸で紅樓夢の中へ這入つたようだ。自分ばはんやりして暫く

これを見詰めてゐると船頭が来て、水が引くから船に歸れといふ。それも可い。自分は飽くまで秦滙の畫舫に親しみたいのである。

船は再びもと来た方へと向けられた。そうしてズン／＼漕ぎ出してゆく。あたりは漸く闇い。あちらにもこちらにもチラ／＼明りが見え初める。應て行手に鴛鴦のように漕ぎ連れた幾組の船が節面白く拍子を取つてあらはれた。その鴛鴦は右に左に流れ廻つて船と船とがダンスをしてゐるようである。あの屋形の輪廓は何と言つたら可いだらうか。佛様のお厨子のやうなものが見える。宮殿の廊下のようなものが見える。三河萬歳のような聲が聞える。裂帛のような胡弓の音がする。どの船からも角燈や大ランプが、あか／＼と闇を照して、鶉色、水色、若草色などの人影がほご好く按排されそれが皆涼しげに水に映つてゐる。あゝ美しい夜の秦滙。

終に臨んで

秦滙の畫舫は總計三百艘あつて一二三號に別たれ、一號船が十元、二號船が五六元、三號船が二三元の船賃であるが、賭博や料理代の收入を籠めると一日三千元、一夏二十萬元の上り高があり、それで一年の生計を得るのだそうだ。船游は男ばかりではない。女連れで而かも藝妓などを喚んでるのがある。南京では昔から官吏の家族等が藝妓に面接する事を平氣に思つてゐる。他の地方には無い事だと黄さんの話。畫舫の額は金箔塗の表面に『人間天上』『秦滙風月好』『月圓人好』『江上樂秦滙』『雲影波光』などといふ字を墨黒々と認めてあり。書も文句も共に月並だが、船を往復させる間にこれが目印しとなつて、あの船も見た、この船も見た、といふ風に丸て曾識の人に逢つたような感じがして面白い。但し船には別に『彩虹』とか『雲鯨』とかいふ名前が附けてある。喚ばれた藝妓はこういふものを目印しに漕ぎつけるのだらう。

四象橋日記

四象橋日記

四象橋日記

宿屋

南洋旅館といふのは南京城内、四象橋の北寄り、せまい通りの東側に在る。私共此處に着いたのは六月二十七日の朝だつた。豫ねてN君の申込みに依り番頭はお世辭よく出迎へ、さつそく二棟ほど奥の、北側の部屋へと案内した。部屋は暗く汚く窓外に井戸があり。そこが女中の洗濯場となつてゐる。定めてうるさい事だらう、と二つ三つ奥の方を覗いてみたが、格別變つた好い部屋も無い。ゑゝごうせ、こんなもんだ、と宿料を訊くと番頭は壁の一方をゆびさし、一日五十仙といふ。そこには看板のようなるものが掲げてある。

『頭等官房、毎大洋一元、照碼五拆、過午兩天』

一等官吏用の部屋は一日大銀貨の一元です。それを五掛にして置きます。但し出發が午後になると二日分の宿料を申受けます、なごゝいふ意味らしい。私は此宿料を安くないものと思つた。二三年前に四馬路の紫陽旅館でこれと同じやうな部屋が一個月十二元だ。今は物價騰貴であるにせよ。南京ではチト高過ぎる。そこで十二元に直切つてみた。番頭は如才ない男で

『此處は宿屋の組合で直段を極めてありますから、これより安くすると組合から除名されます。だが貴方は外國人だから外に洩れる氣遣ひはない。特別に一個月十三元五十仙にして置きましょう。これは極く秘密です。して蒲團はお持ちですか』

『蒲團は持つてゐない』

『では蒲團代を一日十五仙づゝ頂戴致します』
十五仙づゝとする。と一個月四元五十仙だ。何だ馬鹿々々しい。直切つた爲に却て高

くなつたやうなものだ。

「上海ではそんな事はない。蒲團も電燈も皆宿料の中に含めてある」

と言ふと、番頭はヘラ／＼笑つて

「いね、此處では蒲團は別です。電燈料は宿料の中に這入つてをります」

ゑゝ面倒臭いと思つて、とう／＼一ヶ月全部で十七元五十仙といふ事に極めた。恁

ういふ場合に上海では能く「刮皮東洋」なごゝ蔭口をきくものだから此處ではそんな事

を言はぬだけおとなしい。

尙ほ宿屋の規則といふやうなものが額入りになつて直段書と並べて壁間に掲げてあ

る。

「本棧は上下兩江を往來する官吏商人等のために設けあるもので、身元保證無き者、

來歴不明の入及び一人旅の婦女等はお断り致します」

「本棧は警察の御布れに據り午後十二時限り消燈致します。依つて時間後お歸りの方

を待つわけにはゆきません」

「食事は晝十二時から一時まで、晚七時から八時まで。時間外はお断り致します」

「銀貨、紙幣、公文書類、玉器、古董其他貴重品所持の方は、必ず帳場にお預けを願

ひます。萬一紛失すると困りますから」

「部屋は正午過ぐると一日分として計算致します。外にお茶代として勘定の二割を申

し受けます」

「ボーイは何時にても御用命に應じ御便宜を計りますから、御出立の際には多少の心

附けをやつて下さい」

「お手廻りの物は臨時に人を出して停車場まで送らせます」

「食事代は毎食特等三十仙、一等二十仙、並等十二仙です。部屋代はごうぞ三日目に

拂つて戴きたい。そうして五日目には食事代も全部勘定して戴きたい」

これは印刷してあるから、何處でも同じであらう。

支那宿屋の構造は入口から奥まで一定の間隔を置いて幾棟も家を建てまんなかを打ツ通しにして旅客はその兩側の部屋を配てがはれるのである。詰り普通の支那家屋の外廳、内廳（應接室、客間）などの扉を皆脱ぎつけてそこを通路兼溜場にしてあるのである。溜場と部屋とは薄い破目板で仕切り、部屋の出入口は幅二尺五寸、高さ六尺位の一方口で、晝は布簾を垂れ、夜は内から扉を閉めカンヌキを掛けるような仕組みである。客室は孰れも内庭に面して大きな窓を設けてあるが、夏は内庭の上に篷棚といふ竹製の日覆が設けられるので折角の明り取りが塞がつて仕舞つて眞暗である。憊ういふ處では逆も仕事が出来まいと思はれてガツカリしたが、兎に角行李を繕いて書物の整理などした。部屋には白い帳を掛けた無裝飾の木製の寐臺と、食卓兼賭博用の四角なテーブルと、椅子四脚、腰掛二個、洗面台、帽子架などあり。天井からは電球が一つぶら下つてゐるだけだ。偕て何をしようかと考へてみたが先づ手紙を書くことゝ、此土地でタッタ一人の知人なる王春生君を訪問することが最も必要であつた。そこで

手紙を四五通認め、茶房と怒鳴つた。聲に應じて茶房は這入つて來た。

『石板橋まで車代は幾らか』

『はゝ十五仙……十仙位でも行くでしよう』

割合に正直だ。

『石板橋の南方日報館から成賢街の日本郵政局へ行つて、此處まで歸つて來るのだ。三十仙で極めて呉れ』

『ハイ〜』

今年の春三月、東京のステーションホテルで南方日報主任王春生といふ人に逢つた。上海神州日報經理余毅民君の紹介で。その時自分は出鱈目に、私は是非南京で暮す積りです、なごゝ言つたが、それが愈々本當になつたから可笑しい。その日私は王君と一處に畫舫に乗つて遊んだ。

茶房

私は度々茶房と怒鳴つた。それは茶を持つて来いとか、煙草を買つて来いとか、いふやうな些細な用事を言ひ付けるために。

茶房は即ちボーイである。此廳の受持は麻子と大架子の二人であつた。彼等は皆六ツかしい漢字の本名があるのだけれど大抵の場合、恚ういふ渾名を用ゆる。例令ば痘瘡面ならば麻子と呼ばれ、脊が高ければ大架子と呼ばれるだけあつて甚だ人間の價値の低いものである。彼等は一定の給金が無い。そうして一個月十五六元位の収入がある。その収入とは何であらうか。先づ宿屋の規則として旅客から申受ける茶代の分配と、更に別に客からセビリ取る心附けと、バクチの寺錢、遊女周旋の手數料、客から買物を頼まれたとき棒先を切つた儲けなどである。だから彼等は買物が多くバクチが好きで、女が好きな客を歓迎する。

彼等は全く部屋といふものを配てがはれてゐない。臨機應變で何處へでも寐る。空いてゐれば客間にも寐るし、塞がつてゐれば通路にも寐る。

彼等は一定の食事といふものを給せられない。皆客の殘物をつツついてゐるのである。彼等は身錢を出して買ふものは衣服丈けであるが、夏も冬も極めて粗末な物で事足るのであるから、それに就いて大した費用は要らない。恚ういふ苦しい境遇にありながら親兄弟、妻子などを養つてる者さへある。逆も定額の分配丈けでは足りる譯はない。そこで我々の目から見ると甚だ汚い金儲けが行はれるのである。否や決して汚い金儲けではない。彼等に取つては當前の事である。

私は恚ういふボーイと隣合つて住んでゐるのである。

「茶房」

「オー」

と彼等は聲に應じて布簾を掲げて這入つて来る。甚だ便利でもあるが物騒でもある

稽 査

二日ばかり過ぎての夜、大架子がさも遠慮したようなかたちで、にこ／＼笑ひ乍ら這入つて来た。

「旦那、お獨りで淋しくはありませんか。好い姑娘がをります。一つお對手をさせませましよう」

と餘り氣味の好くない顔を近寄せる。

「ウン好からう。だが今日はいけない。用がある」

「そんなら、あした、お呼びになりますか」

「呼ぶかも知れない。どうだかわからない。其時になつてみなければ」

「どうも餘り静かですから淋しからうと思ひまして」

「静かでないで俺れは困る」

「へいそうで御座いませう」

と妙な笑ひ方をして出て行つた。嘗て上海四馬路のまんなかの宿屋にゐた時、夜遅く部屋の戸を開けて『要不要』と女が一人活潑に飛び込んで来た事がある。此處ではそんな事も無いらしい。一つ喚んでみようかしら、だがゆうべ遅く稽査とかいふ兵隊さんがやつて来て何か頻りに身元調べをして行つた。事に依ると今夜も又來るかも知れない、なご、考へてゐる處へ、番頭の案内で這入つて来た男がある。見ると長衫の上馬褂といふ打扮ち、丁寧な挨拶ながら名刺を出した。『丁清崙、敬軒直隸滄縣』私は四五日前に王君の宅で一見した男と思ひ違へて、お世辭よく答禮し、請座々々と椅子など進めた。

「貴姓什麼」

「府上什麼」

それから職業は何、旅行の目的は何、なご、段々面倒になる。は、あ又やつて来た

な、ごうるさく感じたが、恰度机の上にあつた古い支那風俗を一冊見せて

『芝居を見たり、畫舫に乗つたり、バクチを打つたり、女を買つたり』

『どの位御滞在になりますか』

『さあ一年あるか、二年あるか分りません。或は一生あるかもしれない』

彼は首をかしげて雑誌を眺め、何か疑つてゐる様子であつたが聽て此一冊を紀念にするからは是非下さいなご、旨い事を言つて實は宛ら證據物件でも押収したような態ちで出て行つた。何でも安福派の殘黨が、近頃此處で逮捕されたとかいふ事で日本人を疑つてゐるらしい。翌日私は領事館へ行つて、支那警察がうるさいからどうぞ宜しく頼んで歸つて來た。番頭は私の顔を見ると

『又警査が來ましたよ。それで保證人が必要だといふのです。王さんに頼んでみたらどうでしょう』

『いや、頼む必要はない。領事館から電話を架けて貰ふことにした』

『あゝそうですか、領事府なら大丈夫です。どうもお氣の毒様でした』

と番頭は急にベコ／＼頭を下げる。南京は實に巡査の多い所だ。警察總局とか巡警分局とかいふやうなものが到る處にある。人民よりも巡査の方が多いかも知れない。官吏は天津人が多い。津門何々公館などいふのが、あちらにもこちらにも見える。恚う官吏に食ひ倒されては人民が貧乏するわけだ。だが巡査が多いので南京の平和が保たれてゐる。解散兵を皆巡査にしたから彼等は暴動を起さないといふ説もある。

姑 娘

ボーイは暇さへあると女を勧めに來る。或晩私は『お前そんなに俺れに勧めていくらか儲かるのか』と椰楡つてみる。

『いな、些とも儲かりません。唯貴方が淋しからうと思ひまして』

『嘘をつけ、儲からない仕事を誰が熱心になつて勧めるものか』

「實は叫局が二十仙、住夜が六十仙になります」

「では二十仙やるから向ふへ行つて呉れ」

「真逆そんな譯にはゆきません、二十仙だつて私し一人で取るわけではありません。帳場も取るし、外のボーイも取ります。だから幾らにもなりません」

「いくらにもならない事をなせそんなに骨折るのか」

「へへへへ」

と肘を搔いて笑つてゐる。始末におへない。

「よし、折角お前がそう言ふから一人喚ばふ。藝妓はスレてゐて否やだから素人を喚んで来い。あるか。成るべく字が書ける奴が可い。唯顔を見て意思が通じさへすれば可いのだから。女學生みたようなものはゐないか」

「女學生はゐませんが素人は居ります。なに、氣に入らなければ二十仙も車代をやつて追ひ歸へせば可いのですよ」

「そうか、早く喚んで来い」

「酒を上りますか」

「ウン飲まふ。花彫」

「エ」

「紹興酒だ」

「菜はあるか」

「買つて来れば何でもあります」

「そうか、では油鶏、焼鴨、香腸を十仙づつ」

「ハイ」

酒を二口三口飲んでゐる處に二三日前に知合になつた日本人が訪ねて来た。彼はあたりを見廻して

「割合にキレイですね。此處は女が這入つて来ますか」

「いゝね、餘り見ねないやうです」

「押賣をされるような事はありませんか」

「押賣といふやうな事は無さやうです」

其時ボーイは布簾の片側から首を出して私を招く

「姑娘が來ましたが、ごうしましやう」

「差支へない。此處へ這入れと言へ」

ボーイは物蔭に立つてゐた女を招き寄せ部屋の中に押し入れた。日本人は意外のおもちでみてゐた。續いてボーイは茶を注しに這入つて來て

「これは眞正の素人です」

なご、餘計な事を言ふ。日本人は暫く女を見詰めてゐたが

「嘘を言へ。こんな素人があるものか。一體幾程だといふのです」と私しに訊く。

「泊り六弗と言つてゐましたが、氣に入らなければ、二十仙やつて追ひ返へしても可

いそうです」

「高い、私は三弗でも高いやうに思ひますよ。六弗とは法外だ」

そこでよく見ると、月白色の素絹の短い服を着てゐた彼女の顔がいやにドス黒い。

そうして肥厚性鼻炎にでも罹つてゐるのか。腦がぼんやりした様子で口を開け、筋肉が少しも働かない、目は目、鼻は鼻、口は口と各自止むを得ず、顔の表面にくつつ

いてゐるやうに見える。

「そうだね。随分無愛憎な面をしてゐる。返へしましやうか」

「こんなものは下關へ行けば一弗位でありますよ。それに病氣をしてゐるやうにも見

えます。色艶がヒドク悪い」

どうく、此女は二十仙で追ひ返へされた。日本人はボーイを叱りつけ

「こんな安物はいかん、もつと好いのをつれて來い」

ボーイはおどなくハイ／＼と言つて退いた。其時、突然白い長衫を着た支那人が

案内も無しに這入つて来た。

『私は帝國大學の専科を卒業した者です。此處の〇〇病院に通勤してをります。今隣の部屋に友達を訪ねてをります。貴方の部屋中々面白いから來ました』

と言つて名刺を出した。『留日東京帝國大學醫科專科學士、江蘇〇〇醫院醫官蔡融、

楊川江蘇丹徒』

随分無作法な奴があるものだ。外國人に對すると恚うも禮儀が無くなるものか。支那人同志の態度とは丸切り違つてゐる。だがそこが留日の價值かもしれないと私は黙つてゐると日本人は支那人に向つて

『貴方は藝妓を喚びますか』

と訊く。

『いね、病毒が恐しいからさういふ女には一切近寄りません』

と醫者らしい事を言ふ。

『でも診断した結果、無害と認めたらさうです』

『逆でもあの場合、診断するわけにはゆきません』

と言つたので一同噴き出した。此男は一種の好奇心に驅られて來たらしい。どんな女が來るか。さうして日本人はどんな遊び振りをするか、などといふ事を見に來たらしい。

第二の女が來た。今度は少し愛嬌がある。だが頬の下にスジが深く現はれて甚だ氣になる。

『お前は何處だね』

『釣魚巷です』

『歌をうたふかね』

『うたへません』

彼女は我々よりズツと上の方の席に獨立して坐つてゐる。

『もつとこつちの方へ引張つて来ましようか。それとも歸へしましようか』
『歸へして仕舞つた方が可いでしょう。こんな女は駄目ですよ』

と日本人は言ふ。そこでボーイに意を含めて二十仙つかませて返へさせた。外では
婆が黄いろい聲を出して何か抗辯してゐる『歸つて主人に申譯がない』とか『これでも
藝妓ですよ』などといふ聲もした。ボーイは再び這入つて来て、もう二十仙下さいと
言つた。本來夜度資六元、叫局一元四十仙であるから恚ういふ場合に一元四十仙やる
のが當前なだけけれど、ボーイが素人の積りで連れて来たといふ事はもつちの幸でわ
ざと知らん振りしてゐる。女は失望して歸つた。續いて日本人も支那人も歸つた。私
しは唯一人取り残されてベッドの中へもぐり込んだ。電燈が消ぬるかと思ふほど闇い
夜であつた。雨がポツ／＼降つて来た。

菜 萸 腫

太陽がウンと輝いた日の午後、皮膚の色が黄ばんだ眼玉の碧い女が、ペロ／＼した
絹ハンケチをひらめかし乍ら私の部屋の中にある。能く見ると口邊に菜萸のような腫
物が二つ三つ四つ。そうして吭にも何か吹出物がしてゐる。一旦寢台の上に登つた私
は驚いてボーイを呼び寄せ『これは駄目だ』と叫んだ。女は悪體を吐きながら褲子や
上衣を急いで穿いてゐる。何か大事件でも起つたような其場の光景である。
『旦那、今更こんな事を言つては困りますよ』
とボーイは例の肘を搔いてゐる。

『困るのはこつちのこつた。おいこれを見ろ』
と私はムキになつて女の額を抑へ、その口許と吭をボーイに突き付けて見せた。そ
こでボーイは女に向つて一旦部屋の外へ出ると言つた。女はおとなしく出て行つた。

少さな足を運んで、辮子をブラ／＼させながら出て行くその後姿を私は哀れにも見た。ボーイは私に向つて

『いくらか、やつて下さいな』

『局錢だけやらう』

『可愛そうに、二元やつて下さいな』

『宜しい、二元やらう。オッオレッツシ』

蟹 饅 頭

N君は二年ばかり前に南京に来て西釣魚巷の趙素珍といふ女の家泊つた事がある。その時の經驗談を時々面白さうに私に聞かせたものである。上海北四川路翠樂居の二階で茶を飲みながら或る日

『君、南京へ行つたら秦淮に長松といふ料理屋があるからね。そこへ行つて藝妓を喚

ぶのだ。向ふの藝妓は面白いせ。菊の花形の勳章を胸にぶらさげてゐる。それには一等、二等、三等の區別があるらしい。一等は上海と同じでいやに取済してゐるけれど二等の方は捌けてゐて面白い。僕は趙素珍といふ女を買つた。年は十八位、愛嬌のあつた可愛らしい妓だ。一晩泊つて六弗、二晩目には三弗。僕は二晩泊つた。叫局は二元乃至一元四十仙で現金拂ひだ。僕の泊つた處は釣魚巷の入り組んだ路次の中で、眞闇な内庭をズーツと奥の方へ這入つた二階だ。大きな満月形の入口などが見えて静かな好い部屋だつた。朝になつて點心を命じると、面盤のやうな皿に山のやうに積み上げて來たものがある。何かと見ると蟹饅頭だ。こんなに持つて來てどうするのかと見て居ると、二三人の女が寄つてたかつて瞬間にそれを平げて仕舞つた。好く食ふ奴だね。一人で二十位は儘かに食つたよ』

『そうして君の女も食つたのか』

『無論さ。僕の女が先立ちになつて食つたから、皆が負けぬ氣を出して食つたのだ』

肝腎だど机に向つたが一向涉らない。恰度其晩頗る眞剣な面してボーイが這入て來た
『旦那、大した別嬪が見付かりましたせ。今度は屹度大丈夫、是非喚んでやつて下さ
いな』

と胸を叩いてゐる。

『又こいつ好い加減な者を押し付けようと思やがつて』

と言つたが言葉が通じないので、向ふは馬鹿みたいにニヤ／＼笑つてゐる。

『喚んで來い。いくらだ』

彼は親指と小指を延べて他の三指を伏せたし

花 雲 蘭

髪を總髪にして額を四角に剃り上げてゐる。そうして抜き残つた毛が影やうに生
際を暈してゐる。二朱金のやうな耳環がチラ／＼と見ゆる。丸く剃た頸脚、クツキリ

留めた螺髻、サラ／＼と鳴りそつな白い素絹の衫禪など、彼女を飾る扮装として尤も
ふさはしいものである。すこしうつむき加減になつて入口に立つてゐたが、應てチラ
リと自分の方を見たその顔は凄い程、青白く、目には生氣が流動してゐる。年は二十
四歳位。名は花雲蘭

私は此女を四五回ほど喚ぶ中に大分南京花柳界の様子もわかつて來た。例令ば一等
妓館、二等妓館、三等妓館と區別してあつて、藝妓は各館一二三等に別けてゐる事。
税金は『一等妓館の一等妓が六元、二等妓が四元、三等妓が二元』『二等妓館の一等妓
が五元、二等妓が三元、三等妓が一元』『三等妓館の一等妓が三元、二等妓が二元、三
等妓が一元』である。そうして事實上一等妓館は無いやうである。即ち二等妓館の五
元納めてゐる者が一等妓で三元納めてゐる者が二等妓である。花雲蘭は毎月三元の税
金と一元二十仙の徽章代を納めてゐるのである。随分重税だ。

冬 瓜 磬

七月十一日夕飯を食つたばかりの處に快信が到着した。差出人は上海大東旅社十五號室にてN君、『あしたT君が貴兄を訪問するから其積りでゐて呉れ給へ。僕もあそこから行く』同日午前十時發信、

果して翌朝T君が來た。T君が來てから宿屋の料理に一大改革が行はれた。先づ冬瓜磬といふ菜を作らせた。之は冬瓜の中に一羽の鶏を小塊に切つて入れ、四五時間蒸したものである。も少し詳しく言ふと、冬瓜は皮付のまま、九分一に切り、中の實を抜き蓋物のようにして置く。一方鶏は喉部を切り血を搾つた上。熱湯に入れて羽毛を去り腸を抜き、更にこれをブツブツに切つて頭冠も爪も胃袋も皆冬瓜の中に入れて蓋をする。水は入れてはならぬ。又鹽や醬油も入れてはならぬ。そうして腰高の蒸籠に入れて蒸すのである。冬瓜は大きいほど可い。大きければ鶏を三四羽入れる。火は強く

なければならぬ。

T君は外に清燉全鴨を作らせた。家鴨を丸事、土鍋に入れて胡瓜二本、推茸若干を加へ、蓋を閉ぢて四五時間煮るのである。火は強からず弱からず。

此料理は最初皆失敗した。第一の物を作る時、コツクは鶏を別に煮て冬瓜の中に入れてようとしたのである。而かも冬瓜は既に皮を剥がれて仕舞つたのである。

第二の物を作る時、家鴨を四五時間煮ることは炭を多くつかつて馬鹿らしいと考へたのである。そこで彼の惜用方法として先づ強い火で家鴨を煮て熟した時一寸水中に浸して、そうしてもう一遍煮たのである。出来上りは甚だ水ツぽい。スープの中に一滴、水が加はつても水臭くなるのにこんな事をされては堪らない。

T君は遂に躍氣となつて自身、炊事場に赴き嚴重に監督した。そうして更に此二つの物を作らせた。T君は獨身者で台所を持つた事はない。我々が集ると何時も冬瓜磬を作つて食はせるといふ話はあるが、過去、數年間更に實現したことがない。處が今

度偶然彼の手に成つた御馳走を食ふ事になつた。嬉しい。

「汕頭の女は縹緞は悪いが慙ういふ事は巧いものですよ」と彼は語つた。T君は汕頭人である。菜は夕方になつて漸く出来上つた。

「金君今度は大丈夫ですよ」と彼は嬉しそうに蓋を開けて鹽を加へた。冬瓜の汁は實に澄徹して何とも言はれぬサツパリした味だ。

「これは何も鶏ばかりに限りません。小海老、貝柱、椎茸、蓮の實、栗子、火腿、豚肉、鶏肉などを細く切つて入れても可い。そうすると味が純粹で無く別趣の物になります。又雞の代りに鶉や雀を入れても可い。それは百鳥歸巢と言ひます。名前が面白いでしょう」

とT君は説明する。私はスツプを啜りながら遠慮無しに批評する。

「冬瓜は傑作だが、清燉全鴨の方は餘り感心しないね。慙うツユが混濁してゐては第一感じが悪い。だが胡瓜はうまい」

「貴方はサツパリした物が好きだと見える。もつと濃厚な物を好む人もあります。そういふ人は胡瓜の中に豚の叩き肉を入れて一處に煮るのです」

「僕は鍋の蓋をしない方が好からうと思ふ。そうすると。ソツプが澄んで臭氣がない」

「それも一種の方法ですが、家鴨が軟くなるまでには中々手間取れます。そうして、味が逃げやしないかと思ふ」

「そんな事はあるまい。強い火で煮るのでないから」

「いや清燉全鴨は此方法です。一體家鴨は少し濃厚ですが、鶏は餘りにサツパリ過ぎてゐる。だから清燉全鶏を作る場合には、豚のあばら肉を少し加へて煮る事があります。そうすると豚の油を鶏が皆吸収して仕舞つて鶏肉が濃厚な味となり一方豚肉が淡泊な味となります。又豚肉などが多くてソツプに油分が多過ぎる時は、玉子の白味を攪拌して之れに加へ、湯中の油を取つて仕舞ふ方法があります。此場合火は強くても弱くてもいけません。ポコ／＼ポコ／＼と煮立つてゐる程度が可いのです。中々六

ツかしい。まづくやると玉子を皆散らして仕舞つて大變な事になります」

「そうですかね」

「好いコックは何でも材料にします。此處では鶏の血などは捨て、をりますが、あれは上等の料理になるので實に惜しい事です。食鹽水の中に鶏の生血を滴し込み、上方に固まつたものを一寸茹で、スグ掬ひ出して薄く切り、更に鶏のスップを加へて食べるのです。又鶏肉と一處に炒菜にする事もあります」

「へね……そう／＼食べた事があります。益湯街の先得樓で。あれは餘り食べる血を腐らすと聞きました。本當でしょうか」

「そうかも知れませんが。何しろ血斗りですからね。それはそうと日本には甘いソップがありますか。無いでしょう。支那にはあります。例分ば荔枝の汁。杏子の汁といふやうなもので他の物を煮るのです」

「I君の料理談は益々佳境に入て來た。恰度其時ボーイが百合の砂糖湯を運んで來た

「これです。これです」

とI君は妙な弧張な態度で食卓を叩いた。

「百合は唯の砂糖では駄目です。冬瓜の砂糖漬を煮出した汁を用ゐると、うまいのです」

「へね……そうですか。だが、それは砂糖を以て直接煮た物と大した變りはないぢやありませんか。冬瓜を砂糖で煮詰めて乾かしたのが冬瓜糖で、甘い味を出すのは矢張り砂糖ぢやありませんか」

「いね／＼違ひます。冬瓜を石灰に浸した上、砂糖で煮たものが冬瓜糖です。だから一種變つたものになつてをります。これは模造品が非常に多いのです。けれども食通は能く食ひわけます。其模造品といふのは大根を交せるのです。何故そんな事をするかといふに冬瓜五百斤砂糖五百斤を煮詰めて作つた本當の冬瓜糖は出來上り五百斤です。然るに大根五百斤砂糖五百斤で製造すると出來上り七百斤になります」

長松

なん時だか知らないが、兎に角夜があけて又一寢入して、後ち、目が覺めた。

「ゆうべ金君の處に女が來たから、私は遠慮して向ふの十五號室に避難しました」

といふ聲が隣室に聞ゆる。T君だ。

「おい／＼未だ寢てゐるのか、遅いせ」

と遠慮なく戸を叩く者がある。N君だ。

聽て二人はドカ／＼と私しの部屋に這入つて來た。N君は此朝八時南京に着いたのである。

「相變らず御盛んですな。何が傑作が出来ましたか」

「いやもう暑いばかりで」

「暑いさ。一人でさへ可成りうだつて仕舞ふのに、二人で閉ち籠つてゐては、たまる

まい」

と到着匆々突込まれる。N君は上海某新聞社の編輯長で中々急がしい身體である。

それを漸く一日だけ切り抜けて我れ／＼を訪問して下すつたのである。といふと體裁

が好いが實は、會遊の地に會識の美人があるかゝらないかといふことを突留めに來たら

しくもある。けふは清涼山に登つてそれから秦滙で晝食を食ひ、晩には何處か好い處

へ泊つて翌朝七時の汽車で上海に歸らう、といふ口振りである。そこで馬車を雇つて

豫定の通り遊覽することになつたが、T君は山登り否やだといふので清涼山を莫愁湖

に変更した。

我れ／＼は普通一般の遊覽客のように勝棋樓の廣間をぶら／＼歩いて次の間の風通

しの好さそうな席に腰を下し茶を啜つた。前には紅い蓮の花、緑の水草。向ふには石

頭城の古蹟や清涼山などが程の好い高さで起伏してゐる。その下には城壁が草に埋れ

ながら、天然の區劃のやうに地物や水利を取り圍んでゐる。左の方には革命の紀念碑

などがあつて半洋化せる煉瓦塀だのトタン屋根のいやらしい亭などが見ゆる。

「これで折角の莫愁湖もブチこわした」

「未だ狭い範圍だから増したよ、あれ丈け見なければ可いのだから。西湖など来た日にはザラにあるからやりきれない」

「實際こんな物を建てる奴の氣が知れない」

「革命は支那味を破壊しつゝあります」

「いつそ、恚うなるんだから、ウンと打壊して新しい趣味を建設するより仕方がない」

「そうなるぞ金君なんか困るよ。早速種が盡きて仕舞ふ」

こんな取止めのない話をしながら、我々はそこを出て秦淮に向つた。晝飯はN君の好みで貢院前の『長松』に決めた。熱い日の午後、狭い河に臨んだ長松の一室は餘り愉快なものでもなかつた。菜は皆マツかつた。河には魚籠が卸してあり。青魚などが

こつてあるので、清蒸青魚を作らせてみたが、皿に載せて来た物は甚しく瘦せてゐた

「どうです。金君、家で僕の作つたお惣菜の方が餘ッ程旨いでしよう。料理屋の物は凡べて恚うです。何れN君にも御馳走しましょう」

とT君は冬瓜馨を思ひ出して大得意である。隣席ではガラ／＼とバチクを打つてゐる者がある。T君は屏風の際きから覗いてみて

「どうも見たような人だ。商人ぢやない。官吏でもない。運動屋らしい。北京から来たのかも知れない」

とつぶやき乍ら

「これは素人です。姿見があるのに布を掛けない。向ふの手は丸見ねです」

と言つて尙ほも昵つと見入つてゐる。辛亥革命の時、T君は利涉橋の第一旅館に陣取つて大に劃策したことがあるそうで、此邊に来ると感慨無量であると言つてゐた。

釣魚巷

四時間ほど畫舫に乗つてウンと秦淮氣分に浸つた我れ／＼は未だ遊び足りない。

「さあ、之れから何處へ行かふか」

「なん時だ」

「八時」

「恰度好いな。向ふへ行くのには」

「だが行先を極めて置く必要がある。路次の中でマゴト／＼してゐるのは甚だ具合が悪
い」

「ぢやあ趙素琴」

「趙素珍はゐないといふぢやないか」

「いや未だハッキリわからない。兎に角貴方の寫眞を見せて此人は知つてゐるか、と

訊いてみたら、初じめ知らない様子でゐたが、スグ思ひなほして、あゝ知つてゐます
此かたは福建人と一所に來た廣東人です、と答へた。なか／＼利口だよ。福建人も廣
東人も南京では言葉が通じないから、日本人を見てさう答へて置けば間違ひはない」
「よさう、そんな當てにもならない處へ行つては面白くない。第一顔が違ふよ。趙素
珍は君の話のような瘦せこけた者ぢやない。もつと別嬪だ」

「さうか、そんならT君のお馴染の第一流の妓館へ行かう」

「何處だ」

「西釣魚巷の鳳春別墅だ」

「よからう」

「そいつは困る。金太太の處が可い」

と二人の話を側で聞いてゐたT君は笑ひ乍ら反對する。

「僕はいつこの處を好く知らないのですよ。何でも迎仙別墅だといふ話を聞いてをり

ますが』

『そんなら、ごつちでも可い。捜し當てた方へ行かふ』

とN君はスタ／＼暗い路次の中に這入つた。本當に暗い。そうして小便臭い。丸で水の引いた深い溝の底を歩いてゐるような感じだ。車が一台通ると一々門側に寄つて避けなければならぬ、街燈などもあるにはあるが、それが皆煤け汚れて朦朧としてゐる。恚ういふ狭い處に涼台など出して腰掛けてゐる呑氣な人間がある。そこへ又大きな屋台で鍋釜を担いて通る者がある。犬などウロ／＼してゐる。足許に。

『驚いたね。何を踏みつけるか、わかりやしない』

『恚ういふ處に美人が棲むとは不思議だ』

『全く不思議だ。八幡の籤知らずだ』

T君は脊が高いので標札を頻りに見てゐる。『雙福堂』此處の家の者も喚んだ事がありますよ、それ、こないだ來たあの女だ、などと云ひ乍らドン／＼進んで行く。我々

は行軍のように一列になつて入組んだ路次の中をぐる／＼廻つたが、肝腎の鳳春別墅は更に見當らない。遂に路次は盡きて左は青溪渡、右は元の往來へ出さうである。『困つたね。誰れかに訊いて見よう』

とT君はそこにねむさうに立つてゐた巡查を見付て話掛ける。話はスグ分つた。そこで右の方の路を再び進んで行くと、北側に當つて壁を四角に切抜いたような門がある。門を這入ると又壁をまんなりに切り抜いたやうな入口がある。そこには紅燭をこもして線香を焼いてゐる。可愛らしい辮子を附けた女の兒が、鼠のように右から左へチヨロ／＼と馳け抜けた。中は廣い土間だ。片隅に齒の抜けたお婆さんと半裸體の男が物待ち顔に腰掛けてゐたが、我々の姿を見ると男は急に突立つて

『客人上來』

と怒鳴つた。嘗て上海のI君が山賊のやうな男と評したのは、此種の者であるが、南京ではそれほどイモイモではない。支那人はこれを龜奴と稱してゐる。

小桂鳳の部屋は入口に近い處であつた。内部の装置は何處でも大した變りはない。先づ正面に寐台を据ゑて左に姿見附の洋簾筒、帽子架、外套架など宜しくあつて、右にテーブル、椅子を置き壁に對聯を掛けてある。テーブルの上の天井には、襪を取つた白い暖簾が釣つてある。これは旋風器の代用をするもので、二つほど滑車があり。一方で紐を引き、フラリ／＼と運動させるものである。寧ろ大規模の扇といった方が可いかも知れない。三人は先づその扇の下のテーブルの前に坐つた。小桂鳳はお世辭のありたけを盡して待遇する。

『あゝ好く來て下すつた。どうして近頃喚んで下さらないの。私しはこないだの日本語を、すツかり覺ゑて仕舞ひましたよ。洋火、これはマツチでしょう。香煙、これはタバコでしょう』

と一々マツチやら、タバコやらを我々の方へ突き付けて、三人の顔を覗き込む。私しは此女を、きいちやんと言ひたい。日本で私しの知つてる菊ちやんといふ兒は、言

葉こそ變れども此桂鳳とそつくりた。彼女は尙ほもハシヤいで、アリガト、サイナラ、ゴドバイなどと云つてキヤツ／＼と笑つてゐる。

『熱いなあ。逆ても此部屋では我慢する事が出来ない』

とN君は洋服の上衣を脱いだ。女はスグ悟つて紐を取り例の支那式扇風器の運動を開始させる。

『もつたないね。一流藝妓に扇いで貰ふのは』

そこへ這入つて來た者がある。身の丈僅に三尺五寸。つい今、入口で瞥見したあれと同じ者かもしれない。此兒は這入て來るや否や姉さんの手から扇風器の紐を受取つてイキセキ引いてゐる。其可憐な姿にT君は堪り兼ね

『名はなんていふんだね』

『玉芙蓉と申します。私の妹ですよ。上海から來て未だ三月にしかありません』

『そんなら恰度いゝや、Nさんのお對手に』

「馬鹿いつちやいけない。こんな小さなものを、残酷な」

「いゝね、そうではありません。慥かにいけます」

とT君は眞顔になつて年を訊くと十六歳と答へる。

「へね、これが十六かね、僕はどうしても十二位にしか見えない」

とN君は肝を潰してゐる。玉芙蓉は慈悲憐むべしといふ態度で勢限り紐を引いては

T君ご何か話をする。恰も小學校の女生徒が教師から優しい言葉を掛けられて喜ぶように。

「どうです、これにしませんか、屹度いゝですよ。談判しましょうか」

とT君は頻りに勸めてゐる。N君は顔を顰めて

「まあ、よしませう。可愛さうだから」

「いね可愛さうぢやありません。もう幾度も客を取つてをります。上海語で一夜を明かすのも面白いぢやありませんか」

「けれど僕はこんな子供では……」

「そうですかねね」

とT君は不思議そうな顔をしてゐる。私しはT君の不思議そうな顔を却て不思議に思はれてならなかつた。あの小さな未熟な酸っぱいやうなものを、どうして賞美することが出来ようか。幼女○○とか何とかいふ考がスグ頭に浮ぶ。それで一層不愉快になる。でも誰れやらが言つた。血を見なければ承知せぬ男がある。そこで血を見る薬を考へた者がある。カプセルのなかに雀の血を入れて或る處へ入れて置くのである。尙ほその前に艾湯で○○をつかひナルベク○○を收斂して置くのである。そうして○○だと言つて客から澤山の金を貪り取るのである。研究したものだ。

老 郎 會

宿屋に歸つて來た時にはもうガツカリしてゐた。N君はねむさうな顔をしてゐる。

獨りT君は大元氣で

『馬鹿々々しい。一寸行つて二元取られましたよ。あの菓子盆が問題だった。けふは何か藝妓家にお祝ひがあるさうだ。悪い處へ行つたもんだ』

『悪い處でもない。可成りよかつた』

とN君は負け惜しみを言ふ。

『よばふ。よばふ。好いのはいくらでもあります』

とT君は盛んに元氣を付ける。

『そうだ遠來の客を構ふ必要がある』

と私しも調子を合はせた。

『僕はもう勞れたから寐ることにしましょう』

とN君は一向元氣がない。

『それはいかん。わざ／＼南京まで來たのだから、是非一人』

『實はさつき、趙素珍の家の前を通りましたけれども』

『それはいかん。なせ、黙つてゐたのです。そう言へば最初からそこへゆくのに』

『だつて女がゐないといふんですもの』

とN君は聊か拗ね氣味である。

『いや未だわからない。一つ趙素琴。即ち琴でも構はないから喚んでみましょう。或は同じ人間かも知れない』

『いやモウよそう。僕は睡いから』

『そんなら恚うしましょう。金君のが澤山あるから、それを皆喚ぶ。趙素琴は本物が

否かを確める爲めに喚ばふぞ。恚うしよう』

とT君は手詰めの談判をする態ちである。N君も漸く元氣付いて

『よからう、よからう。だがそうするとT君の物は一人も無いようですね』

『私しは筱翠芬を喚びます』

「一人ぢや、いかん、淋しい」

「そんなら今の小桂鳳と玉芙蓉も喚ぶことにする」

「よからう。大に面白い」

と皆賛成した、そこで私しの分として楊玉琴、花雲蘭、陳小寶。N君の分として趙素琴。T君の分として筱翠芬、小桂鳳、玉芙蓉等都合七名を喚ぶべくボーイに命じた。

「さぞ賑かな事でしょうね、中にも金君のが見物だ。皆關係してゐるのだから、それが一番腕前を振ふか見てやらう」

と人の悪い二人は向ふ側の椅子に腰掛けて笑つてゐる。

「酒を飲まふぢやないか、ごうも淋しい」

なごと言つてゐる處へ花雲蘭が這入つて來た。

「ごうです。これが、その、金太太です」

とT君は肘でN君をこづく。

「フン中々好いね。楊貴妃の妹といふのは別でしょう」

と私に聞く。

「それは只今チキ参りますから、ごうぞ宜しく」

と言つてゐるところへ、藍捧綺の服を着たドス黒い女が現はれた。私は前にN君にハガキを出した事がある。「楊玉琴といふと楊玉環の妹と思ふかも知れないが、實は犬のやうな女だ」云々。それをN君は覺わてゐるのである。

「ごうです。これは」

とT君は又こづく

「いいね、これは。全く人間離れがしてゐる」

とN君は言ふ。私しは寢台に腰掛けてゐる。女は右と左にゐる。私しは楊玉琴に向つて

「どうだね。一杯飲まないか」

「我不吃」

そこで花雲蘭に向つて

「拳をしようぢやないか」

「我不對」

そこで又楊玉琴に煙草を出してやる。

「我不吃」

「困つたね。兩方から嫌はれて仕舞つた。今夜は全く貴方がたの犠牲だ。仕方がない」

N君は面白がつて

「支那の家庭はみんなこんなもんぢやないかしら」
と絶叫する。そこで私はN君に向つて

「貴方はこれで間に合はせて置きませんか」

と花雲蘭の肘を小突いて前の方に向ける。彼女は一寸笑つてN君を見た。

「いや、僕はいやだ。そんな事が出来るものか」

と妙に日本人氣質を出す。T君は其意を察して彼女を部屋の外へ喚び出し、N君と一處に別室に連れて行つた。そこで自分は楊玉琴を側へ引寄せ、酒だの肴だの烟草だのを與へる。彼女は急にニコ／＼して飲んだり食つたり吸つたりする。決して犬のやうな女だと馬鹿に出来ない。これでも相當に術を施すから妙である。と思ふと急にかわゆくなつてわけもなくヒツついてゐる。そこへ花雲蘭はあはた／＼しく這入つて來た丸で逃げ出して來た様子で、イキセキしである。續いてTN兩君が這入つて來た。

T君は笑つて

「此女は全く金君に惚れてゐるから手が着けれられない。ね、それでしよう」
とN君を見返つた。

「向ふへ行くこねね君、花雲蘭は金君を頻りに喚んで呉れど頼むのです。喚んでやるから有難うと言へといふと幾度も日本語で、有難う有難う、と言つてゐましたよ。丸で鸚鵡のように、ねね、そうでしたらう」

とT君は興がつて又もN君を見返へる。間もなく陳小寶、筱翠芬、趙素琴などの面々が一度にぎや／＼這入て來た。鶉色、水色、薄紫などが白服の間に交じつて劉海の下から可愛らしい眼が見ゆる。電燈の光が俄に冴に渡つたような氣がした。

「趙素琴はこれですよ」

と私はN君に注意すると

「あゝこれは丸切り違ふ」

とてんで氣に入らぬ様子、T君は慰め顔に

「一體せんの趙素珍は何處へ行つたかと言ふ事が問題だ。先づそれを突き留める必要がある」

彼は藝妓を相手に身元調べを初める。先代趙素珍は無錫の金持に思はれて、去年の暮、二千元の身價で請け出されて行つたといふ。

「そうだらう。あゝいふ美人は長く此地に止るものではない。僕が二度目に來て彼女の姿を見ないといふ事が僕の空想を一層美しくさせる」

とN君は詩人らしい事を言つてゐたが、何となくつまらなさうな顔してゐる。花雲蘭と楊玉琴は蛇と蛙のように暫く睨み合つてゐたが、聽て花は陳小寶にのしかゝつて何やら耳打ちした。これを見た楊はムツとして我々に挨拶することも忘れてイキナリ部屋の外へ飛び出した。

「いよ／＼楊玉琴が負けました」

とT君は面白さうに笑つてゐる。花雲蘭と筱翠芬は一家であつたが、翠芬が頭痛がするといふので雲蘭は姉らしく言ひ譯けして二人とも出て行つた。そこでT君は一人残つた陳小寶に向つて好い女を世話しろと言つた。

「私の姉に陳小紅といふのがありますが、それは大人しくつて好い人ですよ。歌もうたへます」

「ぢや、それをN君の爲に喚ばふ」

と早速ボーイに命じた。其中、小寶の迎へが来たので彼女は調子好く

「今、スグよこしますよ」

と言つて出て行つた。入り交がひに這入つて来た女がある。それは陳小紅で無くして陳玉紅であつた。姉が急がしいから、妹が代りに来たのである。

「こりやあ、N君に對して少し氣の毒だ。けれど我慢して置きなさい。けふは老郎會であいつ等はみんな急がしいのだらう」

とI君が頻に斡旋するのでN君は仕方なしに承知した。承知したと聞いて女は急にハシヤギ出した。それが又N君の意になつて其場の不興は忽ち散じた。

私語公語

同じような騒ぎをして二晩泊つたN君は、七月十六日午前十一時の汽車で南京を去つた。N君が歸つたあとでも我れ／＼の遊興は中々盛んであつた。晝飯を食つて仕舞ふと

「淋しいなあ、一人喚ばふぢやないか」

といふ言葉が自然二人の間に交換され、何時の間にか二三人の女が側にはんべつてゐる始末である。

「急がしい時には女の事なんか考へないが、暇になると、どうもいけない」

とI君は時々後悔したような事を言つてゐる。

「獨身者には必要な物ですから、喚ぶのが當然ぢやありませんか」

「一體獨身でゐるといふ事が悪いのかも知れない」

「悪くはない。今のやうな女ばかりだつたら夫婦になつても決して幸福な事はありません」

「そうでしょうか。それはそうと貴方は支那婦人と結婚する氣はありませんか。若しそういふ考があつたら滿洲貴族の娘を娶るが可い。今滿洲貴族は非常に貧乏してゐますから生意氣でない。そうして家柄が好いので品格もあり學問もあり相當の人格が備つてをります。近頃一般の娘は駄目です。ハイカラで我儘で不道徳で、てんで話にも何もなりやしません。一體支那の女は強情で頑固で亭主のいふ事なんか耳にも入れません。だが、あの一事になると服従します」

「どういふ風に」

「面白い事を言ひますね」

「寶貝とか心肝とかいふやうな事をいふのででしょうか」

「いね、違ひます。そんな事は本に書いてあるだけの事で皆嘘です」

「それでは何と言ひますか」

「一寸言へませんね」

とT君は道がに恥ぢらふ様子であつたが、聽て

「言ひましようか、思ひ切つて」

「ゑゝ言つて御覽なさい」

「子供が出来たら何と名をつけましようか、なんていふ事を」

「へね、そんな事は何でもないぢやありませんか」

「そこが可憐です。未だ外にありますよ」

「どんな事です」

「例へば、ふだん、俺れの事を先生と言へ。或は大人と言へど命じても、どうしてもそう言はない。何負けるもんかといふ氣があるのですね。ところがあの時には先生とか大人とか、ふだん用ゐない言葉を言ふから妙です」

「餘程亢奮するものと見えますね」

「そりやあ亢奮する筈ですよ」

とT君は大に笑つた。

「通常支那婦人は夫を呼ぶ時、ごういふ言葉を用ゐます」

「子供があれば子供の名を呼びます。誰れ某れのお父さんといふやうに。若し子供が無ければ女中の名を喚びます。誰れ某れの旦那といふやうに」

「夫の方で婦人を呼ぶ時には」

「矢張り同じですが省略して子供の名、女中の名ばかり呼びます」

「老爺なごいふ言葉は用ゐませんか」

「老爺といふ言葉は妾が用ゐます。夫人は用ゐません」

自分は嘗て上海淡水路の支那人の家に間借りをした事がある。裏手の部屋に親子三人暮しの者がゐた。亭主は毎晩遅く歸つて來て、門の外で阿毛と呼ぶ。この聲を聞く

どいつも細君はオーと返事をして門を開けに出るのである。阿毛は息子の名である。當時不思議に思つてゐたが、今T君の説明に據つて了解した。

開門見喜

朝、お粥を啜りながらT君はクス／＼笑つてゐる。

「何がそんなに可笑しいのです」

「いや、思ひ出すと可笑しくて堪らない」

「人が悪いね。一人で喜んでゐて」

「開門見喜です、開門見喜です」

「それは何の事ですか」

「貴方の方が先に知つてゐる筈だ」

「知らない」

「困りましたね。支那通が」

張彼仙と劉棲鳳といふ子供がゆうべ来た。そうして張が今朝早く私しの部屋から出て行つてT君の處に寐てゐた劉を呼び起した。二人は部屋へやの入口で何かヒソヒソ話をしてゐる。T君は不思議に思つて聽いてゐると、開門見喜。

「何かありましたらう。變つた事が」

「いゝね氣が付きませんでした」

「兎に角支那では赤い物がめでたいのですよ。君はそれにぶつかつたのだ。もう今夜からあの兒は駄目です。おめでたう、おめでたう。本來劉と張とは廣東では結婚する事の出来ない間柄です。それがゆうべ揃つて来たのも不思議なのに、又その上に開門見喜おめでたう。おめでたう」

四季相思

「私しは妙な性分しやうぶんでして旅の人に別わかれるのが一番つらい。土地ちちの人は何時いつでも逢へると思つてますから、暫く、叫局チヨウキョウが絶たれても何ともありませんが、毎日逢つてゐる旅たびの人が、急に遠くへ立つて行くと、もう堪らなくなります。あゝ一生逢へないかと」

花雲蘭ホアユンランの目には露つゆが宿やつてゐる。ふだんの快活くわいくわつにも似合はず、けふは妙めうに沈しんんでゐる。其おくれ毛けを搔かき上げる指ゆびはなやかに働はたらいて、少しイカツイ感かんのある金の腕環わづらがキラ／＼と光ひかつた。青あい夜よだ。T君が去つてから二日目、南京なんぎんの月は澄すみ渡わたつてゐた

「貴方あなたも何れ上海しゃんはいへ行いくのでしよう」

「いや俺おれは此處ここにゐる」

「そうですか、そんなら好よいけれども」
と彼女はニッコリ笑つた。その時私わたしは寐台しんだいの上に轉ころがつてゐたが、丸けんたうで見當けんたう脱はつれれのこを考へてゐた。あの利涉橋リシヤキョウの端はつれの河中がわで見た廢屋はいきやの前まへのおしろいの花だ。そ

れが不思議に彼女と一致してゐるように思はれてならなかつた。いや、そうではない彼女ば茉莉花だ。夜になると輝いて晝間は睡る。そう思つて目を開くと不思議や、彼女の身邊から甘垂い匂が發してゐる。いやそうではない。彼女は現に後頭部の方に手をやつてゐる。そうして髻の周圍にわがねてある茉莉花の環を大事さうに抜いて机の上に置いた。

六月になると蓮の花が咲く。八月になると桂の花が咲く。そうして自分は秋の扇と捨てられて、なごいふ意味の歌をうたつてゐたが、聽て私の方を向いて

「これは四季相思といふ歌ですよ。知つてますか」

「知らない」

「では大夫小妻といふ歌をうたひましようか」

「ウンよからふ」

彼女は涙をこぼさぬばかりの調子になつて。何か哀れの歌をうたつてゐる。低聲に

「老爺はヤツぱり小太太が好きなんだけれど、大太太を憚つて手を切らなければならぬ。あゝ儘にならぬは浮世ですわね」

と能く日本の藝妓が言ふような事を言つて嘆息する。

「おいごうしたんだい。可い加減にして寝ないか」

「未だ、はよござんすよ。實は蓮心粥を賣りに來るのを待つてゐるのです」

「馬鹿言つてらあ。夜が開けて仕舞ふわ」

「あたしは三つの時、揚州から南京へ賣られて來ました。そうして十八の歳から藝妓に出ました」

「今いくつ」

「いくつだか當て、御覽なさい」

「そうさねね。先づ二十八位だらう」

「フアーニテピー、此釣魚巷にはそんな年寄は一人も居りませんよ」

「だつて、こないだT君が如意子の話をしたら、お前は好く知つてゐたもの」

革命當時秦滙に如意子といふ藝妓があつた。縹緞はゴク悪かつたが不思議に人氣があつた。中にも某廣東人は此女に夢中になつて通ひ詰め、遂に身請けの約束して故郷に歸つた。偕てヒド工面して、金を集めて来て見れば、既に彼女は他に引かされたあざだつた。話は唯それだけである。花雲蘭はこれに關聯していろ／＼の話をした。

「じつさい藝妓も悪るければお客も餘り好くないのですよ。雙方で好い加減な事を言つてゐるから瞞したり瞞されたりするような破目になつて仕舞ひます。私しは世の中の色々な事を見たり聞いたりしましたから、今では何事も當てにしないで、ママ、フで暮してをります」

「ではお前も客と約束した事があるんだね」

「わゝ一度ありました。濟南の軍人でした。もう看板まで引かせて呉れたんですけれど、奥さんが不承知で駄目になりました。楊州人は蘇州人と違つて馬鹿正直ですから

ね。お客の言ふ事を、何もかも眞に受けて仕舞ひます。考へて見れば心細いものですよ。そうして引かされた處が未はどうなるか分りませんもの。李純さんの奥さん達でも第一第二はお金を澤山持つてゐたからよかつたようなものゝ、第三、第四は今何處にあるか、わかりません」

「そうかね、だがお前達は餘り出世を望み過ぎやしないかしら、氣に入つた男なら金持ちでなくても好さそうなものぢやないか」

「わゝ、そうです、顔は悪くても蟲の好いた人があります。そういふ人は又向ふで好かない」

「そんな事はない。大勢の客の中には互に氣に入つた者が一人や二人屹度ある筈だ」

「わゝありますとも、けれどお母さんといふものがあるから私しの自由にはなりません。王小蘭子のやうに二萬元も溜め込めば些つとは我儘も出来ますがね」

「お前の家（迎仙別墅）からも副總統が出たね」

「わゝ、黄小寶といふのでしよう。あの妓は王さんのお蔭で副總統に當選したのですが今では大分生意氣になつて王さんも愛憎を盡かしたようです。あゝいふ薄情なやりかたではないけません」

この時自分はふと谷崎氏の『南京奇望街』を思ひ出して、あの掌の中に這入りさうな女の消息を聞きたくなつた

『お前は花月樓といふ女を知つてゐるかね、二三年前に此處に居た筈だ』

「わゝ、知つてをります。あの妓は可愛さうに折白黨に瞞されて鎮江に轉賣されました。そうして今では大層苦勞してゐるやうです。本當にねね、そういふお客もあるのだから私達の方も段々疑ひ深くなるのです。昔、恚ういふ話がありました。或る金持の若旦那が南京の藝妓に夢中になり愈々それを引かせようと思つて上海にゆき、西洋の珍しい道具を澤山買ひ込みました。すると老僕が「あの女の心が好くわからないのに、こんなに多くの贈物をして馬鹿々々しい。ためしに私の着物を着て一廻行つて御覽

なさい。それで向ふが待遇したら心體が見わたのです」

と勧めました。若旦那は成程と思つて老僕の着物を着て南京にゆきました。藝妓は若旦那が適切に勘當されたものと思ひ込み、打つて變つた取りなしぶりで部屋にも入れません。再三行きましたけれど面會もしません。若旦那は仕方なしに引返へして再び以前の着物を着換へて行きました。藝妓屋では現金に待遇しました。女はにこ／＼して出迎へました。どうでしょう。其時の若旦那の心持ちは。全く今までの事は皆嘘だと解つたので失望し落膽し、小蒸汽に何杯も積んで來た澤山の道具を楊子江の中流に押し出して惜しげもなく焼き棄てました。これを見た女は後悔しても及びません。驚き、嘆き、悔み、遂に狂亂の體で濁流に身を投じ、夢のような最後を遂げました。ですから決して人を疑つたり侮つたりするものではありません』

と語る花雲蘭の目は異常に輝いた。

金 林子

小翠芬シヨクイファン、お前は本當に可愛らしいねんねだ。姉さんの花雲蘭から色々話を聞かされてそれでこんなになつた眞似をするのだらう。香水や繪草紙を見せつけられてそれで急に日本人が好きになつたのだらう。私しも一度そんな經驗があつた。クリスマスマスの前夜築地の教會堂に行つてヤソ一代記といふやうな繪本を貰つて、それから無暗に西洋人をなつかしいものゝやうに思つた。お前の今の感情は慥かにそれだ、私しが耳を塞いであればお前は胡弓を弾く。私がうっさいと言へばお前は尙ほも聲高に歌をうたふ。あゝ今夜はごうしたものだらう。喚びもしないのにこんな亂暴なお嬢さんが舞ひ込んで来て私しの仕事の邪魔をすと思つて眠つとねめつけると、彼女は急に恐しくなつたと見え、隅の方へ引込んで私しのガーターを持ち出し、それをオモチヤのようにひねくり廻し、それをあの華奢な玉器のような脛に押し當て

『頂戴な』

と言つて首をかしげてゐる。雨が降つて急に涼しくなつたが、未だ一枚の單衣物でも事足るのに、お前はなせか幾枚も單衫を重ねてゐる。初め私しはお前を黒い女だと思つた。處が寐臺の上のぼつて上一枚を剥ぎ取るとお前は忽ち深紅の女となつた。そうしてその可愛らしい胸元からあの小さな鼈甲製らしい盒を取り出し、それを耳邊に押しあてゝ

『叫々』

と言つてゐる

『何だね』

『チンリンツトです。好く鳴きますよ。おまんまをやれば可いの』
私しはこれを透かして見ると、なるほどゴホロギのやうな蟲が三つ
これは何といふ蟲だね』

彼女は逆も口で言つては解らないといふやうな子供らしい冷笑を浮べて、テーブルの上にあつた色鉛筆を取り上げ何處から出して來たか一枚の名刺の裏に書きつけた。覺束ない筆つきで

『金林子』

私しはこの名刺の表をかへしてみて

『Chen Chih Chong』

と思はず發音した。

『不錯、チェン、チー、チヨン』

と彼女は急に眼を輝かした。そうして側にあつたスリーカツスルスの蓋を指し

『これは何と言ひますか』

と訊く。

『W. D. & H. O. Wills, Bristol & London. 中に金米糖があつてそれがトレードマーク

だ』

『何ですつて、もつとよく教ねて頂戴よ』

『英國香煙公司の名字だ』

『ではこれは何です』

と又變な物を懷中から出す。

『King Chong』

表紙に巴里の女優らしい像が印刷してあつて、中は剥ぎ取りである。極く小さな帳面だ。

『これは顔を拭くものだらう』

『ねえそうですよ』

と言つてにつこりする。八月末の或る夜、赤い單衫を剥ぐと下には水色の小衫を着てゐる。水色の小衫を剥ぐと下には猿の着さうなような小さな肉色の背心を着てゐる

支那の女は火腿と白蘭花と交せこせにした薫りだ。
翌朝彼女は抽出の中から銀の煙草入を捜し出して
「頂戴な」
と言つて、持つて行つて仕舞つた。

葷素雜誌

葦素雜誌

蛇のような女

八月の初め頃から南洋旅館に蛇のようなヒョロ長い女が泊つてゐた。年は十九だといふ。カーと唾を吐くところは如何にも神経質のようだが、目付は優しく口許は尋常で長い乍ら全身の鈎合は取れてゐる。彼女は眞夏にふさわしい烏雲紗の衫褲を着て人の通る客堂の隅で娘嬢を相手に髪など梳かせてゐる。それは劉海（前髪）を下げず、總髪にして、後を絞絲髻に結び、その中心を紅糸で括り、わざと年満の風を装つてゐるなど、中々の曲者らしい。熱いせいかもしれないが、此女が部屋の内落ち着いてゐた事は滅多にない。一日のうち食事以外は大底通路の兩側にある椅子の其いづれか

に坐し、團扇などつかつてゐる。時々この部屋の前の井戸側に来て洗濯女に話し掛けそこへ來合せた田舎びた細君の目の中の埃を採つてやる。又時々宿屋の子供を相手に鬼事などしてゐる。

『捉まへて御覽。つかまへられないぢやないか』

とキヤツキヤと笑つてゐる。

此女はズツと奥の方の部屋にゐたが、或日私しと向き合つた部屋に移つて來た。何だか大變氣六つかしい調子で、奥のボーイの待遇が悪く、煙草一つ買ひにやつても中々手間取れると怒つてゐる。ボーイは擲擲ひ半分に、餘り重さうにも見えない彼女の荷物を、エーホー、エーホーと掛聲で運んで來る。バケツや焜爐や朱塗の下盥までもある。

晝過ぎになるといつも布簾を開放しにして洗面臺に對つてゐる。香肥皂をタオルになすりつけ、雙手でそれをクシャ／＼と揉み付けてゐるかと思ふと、提籃の中から腰

高の瓶を三本はご取り出し、その中の液體を代る／＼掌の上に滴し込む。此等の動作は凡て兩臂を張つて行はれるので、私しはそこに支那婦人らしい面白味を感じてゐると、彼女はチヨイ／＼こちらを見る。そうして何やら赤い真棉の球を取つて顔の表面に打ち付けた。その時布簾はバタリと垂れたが、間もなく白粉をつけた顔が布簾の片端から現はれた。彼女はボーイに何か命じてゐるのである。識らぬ異性に對しては一種の好奇心を惹き起すもので、私しはそれから彼女の一舉一動を注意するようになった。

彼女は一日二三度娘嬢を外に出して部屋を閉ち浴みする様子である。そうして其度毎に必ず服裝を更へて出る。ジミな着物が忽ちイキな着物になる。イキな着物がハデな着物になる。或時は女學生のように髪を七三に別け、横髪を眞珠の簪で留め、紫棒縞の軽い上衣に洋風を加味した黒裙を穿いて、日本製らしい襦袢の洋傘を提げて出てゆく事がある。

「けふは清涼山に焼香にゆくのです」

「けふは貢舞台に三麻子を觀にゆくのです」

ボーイは忠義顔して彼女の行動を一々私しに注進する。妙な女だな、一つ試してやれ、と或晩一紙を彼女に送つた。

「私しは日本の貧乏文士ですが、承れば貴女は詩文に長けてゐるとの事、一度お目に懸つて清談を交したい」

と書き付けたものである。

ボーイは爆弾でも預つたような調子で、己が頬を己が手で叩いて「これを持つてゆくと吃耳光です」

と拒んだが、私しが嚴命したので遂に出て行つた。どういふ結果を見るだらう、と多少不安を感じてゐると間もなくボーイは這入つて來た。

「返事を取つて來ましたよ」

と唐紙の二片を出す。

一物甚希奇、雙峰隔小溪、泉中水滴滴、戶外朝淒淒、有水魚難養、無林鳥能棲、千金難得覓、世人皆要迷、君如實破此語、改日到來臨。

揚州では見識らぬ素人の女に附文しても決して怒らない。

「内の娘は賣物でありませぬから、折角ですがお断り致します」

と寛容ある返事をよこすそうだと。たから煙草屋に店番してゐる妻女が平氣で酒席に侍るようなことがある。他國の風俗の亂れたことは凡て誇張して傳へられるものだから今此返事の模様を見ると万更嘘でもなさそうだと。

此女は揚州人で南京胡家花園の第三妾だそうだが、親指もあるし子指もあるといふ子指は表向き以外の内證の旦那を持つ意。そうして毎日行水するのは脚に腫物があるからだそうだと。八月下旬には彼女の新宅が出来たので愈々そこへ引移るとの事、そこで私しはもう二度試みる積りで左のような出鱈目を書いて送つた。

「來ること遅くして去ること何ぞ速かなる。楊柳婦人の心、一顧百媚を生じ、千態只風に從ふ」

返事は折りかへして來た。

「不要思不要想、思段肝腸病一場、除非斗金來伴我、無有斗金夢一場、行旅之人要緊甚、不要糊塗在外方」

今日回你一次、下回不可、吳名氏逢夏、兩次回信

この文章を支那音で讀むとまことに句調が好い。丸で舞を舞つてゐるようである。此女は芝居歌や俗歌を以て教育されたものであらう。だがその内容は徹頭徹尾金だつた。

八月二十六日には胡家の旦那が迎へに來た。二十四五歳位的美男子だつた。娘は充奮して片附物なごした。愈々けふは引上げである。用意が出来たので彼女は女學生風の装で例の緹紅色の洋傘を提げ、馬車に乗つて出て行つた。省長公署の裏手に新

宅を定めたといふ。

督軍署の壽誕

八月二十日督軍公署の正門に五色の民國國旗が交叉された。きのふから三日間齊封翁の壽誕があるので南京の街は黒樹藍袍の人が多く徘徊した。この宿屋にもそういふ人が二三名泊つてゐて早朝から威勢好く馬車を驅り出した。私は領事に連れられてその壽誕を見に行つた。衙門式の大きな門の内外には、武装いかめしい兵隊さんが通路の左右に並び立ち、我々を見て捧銃する。大廳の柱には康有爲寄贈の對聯を懸けてある。入口といふ入口には紅色の結綵を掛けてある。雨が盛んに降つて來た。案内されたのは廊下を曲折して行つたズツと奥の漪瀾閣といふ水樓の端れで洪秀全宮殿の名残だといふ太湖石の庭に面した支那建物（支那）の小さい玄關である。それが恐らく四疊敷位かと思ふほど狭い感じがした。入口に來るまでには黒樹藍袍の人々に代る／＼握手さ

れ、夢我夢中でそこに引張られて行つた。這入つてみると玄關の中は唯赤い。大火事だと言つても可いように。そうしてその燃ゆるような猩々緋の幃子に圍まれた中に、けふといふけふは支那中で一番嬉しうな笑みを含んでゐる人が二人立つてゐた。

一人はすなはち齊督軍で藍色金モールの大禮服を着け、我れ我れの姿を見ると應揚に前に進んだ。他の一人は督軍第一夫人である。

彼女は丸顔の愛嬌の満ちた若い女で、黒地に綠繡と金繡を施した上衣（女外掛）に緋色のこれも金繡を施した十二欄裙（チエンチエン）を穿いてゐた。そうして額には劉海を下げてゐたお辭儀するたんびに髻の周圍を飾つた花が美しく顫れた。私しは慙ういふ場合が支那婦人の最も得意とする生活の絶頂であると思つて、いつまでも夫人の顔を見詰めてゐたが、夫人の顔は益々緊張して咲き誇つた花のような勢があつた。

やがて此處を退いて餘興場へと案内された。餘興は支那人等の最も好む芝居であつた。芝居は朝から眞夜中までぶつ通しに演ぜられるのである。そこには能舞台のやう

なものが設けられ、左右は廊下。正面は棧敷。また平土間に當る部分にはアンペラ殿堂形の小屋掛けがしてある。自分等の席は舞台に向つて左の方である。そこには既に外國領事の面々が、ずらりと椅子を並べて控えてゐる。

演劇は今三回目で『八仙慶壽』のなかばであつた。何しろあの九陣風が斌媚を添へた腰付で、流蘇を飾つた武器を取つてチャン／＼バラ／＼やらかすのだから、何んとも言はれぬ風情がある。暫く見惚れてゐる中『飛虎山』の劇と代つた。その時みな席を立つた。何を立つのかと思ふと一人の外人が這入つて來た。銃劍を手にした支那兵士が十二三名、物々しく續いて來た。見ると

齊督軍がいつのまにか藍衣黒掛の第二禮服（支那服）に着換へて兵隊のまんなかに挟まつてゐた。督軍は懸て前の外人と席を並べて我々と同じ廊下に坐した。あの古代の面型にありさうな頑丈な少しシヤクれた大きな顔は金モールよりも支那服の方が餘程好く似合つた。外人等は皆督軍に向つて勢限り阿諛した。

「けふは雨が降つたので涼しくて好い」

「いつ見ても支那芝居は面白くて好い」

なごと言つてゐたが、實は先程から八釜しい銅鑼の音と蒸し暑い氳氣に閉口してゐたらしい。そうして見てもいやな女同志の仲好しが好くやるように督軍の耳に口を寄せ、ベチャ、クチャ喋べる者もあつた。それが英語や其他の外國語でなく皆流暢な北京語であつた。

督軍は一寸蒼蠅さうな顔したが、兎に角芝居の番組の談明なごしてゐた。間もなく雨はドシヤ降り降つて來た。日覆と廊下の屋根の隙間から水がド／＼と落ちて來た。督軍はそればかり氣にして副官に

「何とかする方法はなからうか」

と言つたが、格別旨い方法もなかつた。やがて一人、猿のように柱に攀ち上る男があつて、その雨漏を禦ぐ積りらしかつたが、却て瓦などが落ちて來て危なかつた。

婦人席は正面の樓上樓下で小屋掛とは掛け離れてゐたので、そこは着物を濡すような恐れはなかつた。餘り景氣の好くない外國婦人も二三人見えてゐた。姨太太の小姐、大姐だの色々の女がそこにゐたやうだが、目に注ぐやうな風體をしてゐる者は一人も見えなかつた。

劇は『飛虎山』から『硃砂痣』に進んだ。硃砂痣の吳妻に扮した青衣が歐陽君にそっくりなので、若しや南通州から來たのぢやないか、と番組を見ると違つてゐた。それは貫大元、諸如香といふ役者であつた。それほど支那劇の扮装が類型的である事を証された。『金錢豹』が濟むと、督軍は各國領事に食事を薦め、接待係は一同を案内した。

食堂は正門突當りの大廳左手に當る西洋室である。世界地圖の外には何物もない、凡ての部屋飾りを抜きにした處を見ると恐らく將校會議室を臨時に充てたものらしい。そこには三台の圓桌が据へられ、白布を敷いた上にお定りの八冷葷、四乾果が程

よく排列してあつた。我々は奥の席に就いた。その席には三十年間も南京にゐるといふモリスといふ西洋人が一人交じつてゐた。御馳走は皆マツかつた。冷めたせいでもあつたらうが、我々が始終上海で食つてゐる物の方が餘程旨いやうだ。天津からわざ／＼コック長を連れて來て一卓十六元で請負はせた料理がこれである。先づ最初に出たのが燕窩、魚翅、次に炸鴨肝、炒雞絲、炒魚片、口蘑湯、溜黃菜、炒蝦仁、全鴨條、點心四道及び壽麵である。壽麵には藥味が四種ほど並べてある。飲料はビールとブランデーとサイダーである。Sといふ日本醫者も來てゐた。これは督軍附の醫官で、曾て李純を診斷したこともあり、可成り信用を得てゐる。けふの壽誕には日本花火を三百發ほど寄附したといふ。モスリは箸で物を挟むことが上手で殊更滑りそくな物を挟んで皆を笑はせた。

食事が濟んでから再び芝居を見に行つた。恰度小翠花が『鴻戀禧』をやりかけてゐた。聴し乍ら小翠花も初めてだが、顔は寫真で見覺へがある。實物は寫真よりも遙か

に美しい。生憎柱の影で充分見えない。残念に思つてゐると接待係が来て

『正面が開きましたから、どうぞこちらへ』

といふ。雨漏りのウンとする至極厄介な處であつたが、芝居見物としては持つて來いの眞正面であつた。尙小雲の『天配姻縁』を見る。道がに聴花子が仕込んだ丈けあつて色氣もあるし、聲も好いので惚れ／＼する。次に『木蘭從軍』の赤ツ面。李壽山が落ち着き澄して立ち現れ僅か二三聲で引込んで仕舞ふ。甚だ呆氣ないが何とも言はれ、趣がある。入りちがつてそこへ一人の女形が出て來た。齒は黒く頬は瘦け容色甚だ衰へてゐるが、本劇の主人公木蘭女とは察せられる。聽て女中を相手に武器を取つて闘つてみると一舉一動寸分の隙が無い驚くべき藝術である。儲てこそこれが當年の名青衣王瑤卿のなれの果とは知られたれ。愛嬌もあるしコツも好い。阿片が好きでフラ／＼になつてゐるのに舞臺に出ると丸ツ切り人が變つて仕舞ふのだそうだ。

雨がドシャ降りに降つて來た。午後三時、歸る。

孟蘭盆會

八月二十八日宿屋の軒頭に紅提燈が四つほど吊り下げられた。夕方から門内の土間に橋形の佛壇が一頂、紅緑の絨球で飾られ、内には釋迦牟尼佛を中心として幢幡を持つてる四天王、二童子などがピカ／＼と安置されてゐる。壁の一方には掛軸がある。それには

『土色の形相凄じき、否な寧ろ滑稽を感ずる餓鬼が瘦せ細つた頸を延べ、枯木のような手に飯碗を持つて跌坐してゐる。下には行路病者が行き倒れてゐる。見利大人、一見大吉といふ畸形兒が舌を吐き手を指し延べて立ち、傍には凸助男が笑つてゐる』

繪は思ひ切つて下手だが頗る支那の俗世間を現してゐるものである。儲てその軸の下には『水陸一切男女孤魂等位』といふ位牌が一基置かれ、之れがけふの施餓鬼の本體である。見ね、蠟燭や線香を恭々しく供へてゐる。そこらの打敷や器物の表面には

『送聖功德』『白佛禪院』『瑜伽焰光』『施食道場』などといふ文字が見える。廳で四本の紅燭が灯されて、佛壇の左右に六名の伴僧が坐を占めた。佛壇は家の入口の方に向けあり、下に圓坐一枚敷かれてある。又佛壇の後に一個の寶坐を設け、そこに毘盧帽を冠つた主僧が法衣袈裟姿いかめしく現はれた。袈裟は海老色の蓮花模様で、一瓣毎に彩光を施し孔雀の羽根にも紛ふばかりの素晴らしきである。

お勤めは火灯し頃から初まつた。先づ此家の主人は圓坐の上に跪いて佛像を禮拜し了ると、伴僧の一人が小磬を手にしてチーンと打つ。續いて他の伴僧がヂャブ／＼ヂャブ／＼と鏡鈸を合せる。

和讃は空也念佛のような音調だが、もつと節が混み入つてゐて俗歌のやうな面白味がある。

チン／＼ドン／＼チャンと太鼓入りで囃し立てる。それが濟むとお經だ。これは日本と同じやうに無茶苦茶に早く讀む。經文は金剛般若羅密經である。ナマクサマシダ

と聞ける。アワズニヨホーと又聞ける。主僧は水を撒き米を撒き咒を結び印を切る。そして時々鈴を振る。その間に二人の寺男が立居して、衆僧に茶を薦め顔拭きを出し或は蠟燭の芯を剪る。主僧が經を讀み了ると寺男は待ち兼ねたやうにその面前から經卷を撤去して籠の中に抛り込む。經卷は僧自身と雖も餘り大切に扱つてゐないやうだが却つて天蓋だの袈裟だの打敷だの、さういふ類のものゝ鄭重にする。最後に『靈鷲峯拜別投呈』といふ一文をどう云ふ譯か裏返へして讀上げた後ち一僧がそれに蠟燭の火を點じて慌て、戶外へ出る。同時に家人は澤山の紙果を持ち出し投呈の文と一處に路上で焼く、周圍には大勢の人が集つてオミドフ、オミドフと呟いてゐる。午後十二時衆僧は客堂に招かれ齋をする。客堂と言つても私しの部屋の前通路だ。齋と言つてもお粥に味噌漬、南京豆などに過ぎない。その日は舊曆七月二十五日、當家で施餓鬼を行つたのである。

李相府の芭蕉

貸家があるといふので私は同宿のUさんを誘つて見に行つた。九月なかばの空は晴れて未だ中々暑い。案内したのは宿屋のコックと床屋の親方だつた。二人とも小肥りの男で、白と藍の支那服が眼の前にチラついた。

中正街は停車場附近の錆れた裏通りに、榮華の夢から置き去りにされたような黄色瓦の二層廟がある。萬壽宮といふ。附近は廣々とした畑で明るい池があり、遠くの白壁の上には木立があちこちに繁つて野鳥が頻りに啼いてゐる。此廟の五六軒東に築地を前に控へた下屋敷風の家がある。門に入つて中庭に出ると、兩側の平家に黒塗の格子窓がズラリと並んで、廣い中庭の瓦石の間には紅い月季花（支那薔薇）が緑の葉の上に點々一叢をなしてゐる。屋根が低いので隣屋敷の楊柳が延び上つて圍んでゐる。『面白いなあ、此家は』

ごアマチユニアのUさんが感心して見てゐる。コックと床屋は家の中程にある開放しの客堂に入り

『此處へ来てお掛けなさい』

と招いたが、その物臭さうな椅子やらテーブルを見ては白服の汚れることが先づ氣遣はれ、唯頷いて立つてゐた。恰度そこへ出て來たのは羊羹色の馬褂を着た人の好きさうな老人と色の白い小肥りの三十恰好の世話女房であつた。女は世事馴れた調子でお茶など運び、彼等の間にいろ／＼の挨拶が交換されてゐた。それを隣室から覗いてゐた若い二人の娘があつた。蠟細工のような生氣の無い顔立は上海で賣れツ子の曼陀柏生の筆になる石版畫を思はせる。

『此家かね』

と私は庭から聲を掛ける。コックは振返つて『いね外です』

と答へた。老人も細君も娘も珍しさうに我々の方を見てゐる。やがて老人が先立ちになつて案内したのは、それから一町ほごもない同じ通りの北側を占領してゐる素敵滅法な大きなお屋敷で、表門に『道德學社』といふ看板を掛け、戸口に兵隊さんが二人張番してゐる。構内の壁には

『無錫某寓』

『常熟某寓』

『天津某寓』

なご、紅い標札紙がいくつも貼つてある。我々は大廳の側の壁に面した甬道の中に連れ込まれ、その薄闇い處に暫く待たされた。自分の顔はわからないが、側に立つてゐるUさんの顔を見ると、丸で幽霊のように青白かった。Uさんは腰に飾帯のある鼠縞一重の背廣を着て布製の圓帽の下から、大きな眼を光らせつゝ、そこらを見てゐる。『何でしょう。此ナガシみたいなもの』

と足許の妙な水落をステツキで叩いてゐる。その様子が丸で殺人事件の跡調へといふ格である。私に貸さふといふのは此お屋敷の附屬建物で、高い壁の中の奥まつた二區劃であつた。家は二階建、方形の中庭を圍み、庇を出して廊下を設けてある。廊下に添うて部屋がある。部屋の全部は腰板を嵌め上部はみな窓である。窓の戸は藍塗格子で或は開け或は閉ちてある。その開けてあるものは下から上へ突ツかひ棒を渡してある。内には十五六名の女族が青白い顔して監獄の女囚のやうに殆んど外部と接觸無しに洗濯やら針仕事やらしてゐる。庭には鋪甌が苔蒸し二十四孝の繪にあるような芭蕉が二三株、その闊い見事な葉を空に向け、或は折れ垂れてゐる。私しが此家を一人で借るといふことに就いてUさんは心配してゐる。

『恁んな陰鬱な青い光線の射すところは、どうでしょうかね。電燈は無し、裏には腐つた溜り水がある』

實際私しもそう思つた。眞晝間こんなに大勢の人がゐて、然も此淋しさでは夜が思

ひやられる

『やめよう』

あとで聞くところには李鴻章の屋敷跡で昔は嚙ぞ漢宮式のお妾さんなどが棲んでゐたことだらうと思はれる。支那の女も随分辛氣臭いものだ。恁んな處に這入つてゐるのだからな。

金木犀の邂逅

九月末から十月初めに掛けて南京は甘い薫りで満ち／＼した。それは金木犀の枝を持つて歩く者が多いからである。或日私しは一枝買つてテーブルの上に投げ出して置いた。支那趣味と寺の匂なごと取留めのつかぬことを考へてゐる時、出入りの床屋が這入つて來た。

『修面』

『まだ早い。あしたにしよう』

彼は顔剃りは附けたりで何か別に用事があるらしくあたりを一寸見廻し乍ら自分に近寄り

『晩に店まで來ませんか』

と意味ありげに笑つてゐる。月白色の單衫は汚れて鼠色に近い。開衩の邊には鍵の手狀りのツギを當ててゐる。此男は仕事は極く下手だが中々のお世辭者で、私しの顔を剃るたんびに、姑娘はお止しなさい。無駄な金ばかり要つて馬鹿々々しいから。それ、來ましたせ、別嬪が。あゝいふのを吊勝子しなければいけない、と中庭にゐて客堂を通る女客の品定めをする。一度は恁んな話に夢中になり、剃刀の手を滑べらせて私しの頤に豪か薄傷を負はせたことがある。姓は白と言つて天津人、職業は違ふが金瓶梅の應伯爵みたいな男だ。

『お前の家へ行つても可いか汚いからな』

「いゝね、けふは綺麗なものを見せます」

「そうか、それでは行つてみよう」

「夕御飯を上つたらスグ来て下さい」

「よろしい」

「では屹度ですよ。待つてゐますから、茶房には内証です。めつかつたら髯剃りに来たど胡麻化して下さい」

午後八時頃宿屋を出て五六軒北の白の店の前まで来ると後から聲を掛ける者がある
見ると白だ。

「何だ。お前は往來で待つてゐたのか」

「さつきから貴方が来るか来るかと思つて、出たり這入つたりしてゐました。サア早く行きましよう」

と南洋旅館の方を一寸振返つてみて私しに構はずサツサと歩き出した。何處へ連れ

て行かれるだらう。それが當面の謎で非常におもしろい。暗い街ではあるが見覺はのある通りである。高い壁續きの狭い横町を五六町行くと李相府だ。それを左に折れてあの築地のある黄色瓦の方へ行く。白は恁んな倉暗に来てまでも人目を忍んでゐる様子が第一氣味悪い。

「こないだ貸家の件で會合した、あの娘のある家だね」

彼は頷いて手を曳いた。

「蘇州人で。素敵な別嬪です、そして全くの素人です。氣に入つたら奥さんにおしなさい」

道路から見ると門に並んだ壁際の小高い處に三つほど小さな窓が並んでゐて、室内の燈火が外界とは殆んど交渉なしにぼんやり洩れてゐる。

「阿妹、阿妹」

と白は四五度呼んで戸をそつと叩く。自分には聞かなかつたが、内で返答したもの

と見て、白はそのまゝ黙つて立つてゐた。暫くすると黒いものが足許に近寄つて来てふん／＼匂を嗅き付ける。私しはギョツとして白にすりよつた時、ガチリと門を脱す音が聞えて戸は内から開けられた。角形の堂號入の提燈が鼈甲のように透き徹つて朱書の文字が鮮やかに見ゆる。

『三槐堂』

老人は我れ／＼の鼻先に此提燈を突き付けて甚だ不機嫌な様子で、そこへ飛び込んて来た黒犬を蹴飛ばした。白はそれにも構はず私しの手を引いて門内に入つた。後の方では大がギャン／＼哭いてゐる。白は又

『阿妹阿妹』

と二聲三聲呼んだ。向ふの部屋では窓際にランプが置いてあるとみね、紙張の格子があか／＼と見ゆる。それがふツと消れた時、物影に婆さんらしい人影が現はれ、暫らく白と押問答した結果、兎に角一室に案内されることになつた。その部屋といふの

は應接間の片側で過日二人の娘が首を延べて外をみてゐた處である。正面に白帳を掛けた寐台があり左手に四角なテーブルがある。そこにランプを置いて三十位の女と六十近い婆さんが相對して坐つてゐた。白は私しの手を曳いて遠慮なく寐台の端に腰を下した。そうしてお世辭好く二人の女に何やら話した。對聯の下の檯子には金木犀の花が散りこぼれて、そこら一面に甘い薫を漂はせてゐる。やがて白は私の耳に口寄せ

「どうです、あれは」

「何處にある」

「何處にツて、貴方、目の前にゐるぢやありませんか」

と白は私しの膝を突いて笑つてゐる。私しは初めて氣が注いだ。彼が世話するといふのは、あの蠟細工のような若い娘でなくして、借家一件の時、茶を持つて出たあの年滿の細君らしい人であつた。そこで注意してみると彼女は大にテレて寫眞をうつす時のような取濟し方である。

「話(はなし)はあとにして兎(う)に角(かく)此(こ)處(こ)を出(い)ようぢやないか」

と私(わたし)は白(はく)を促(うなが)して戸(こ)外(がい)に出(い)た。

「どうです。い、でしよう」

「随(ずい)分(ぶん)年(ねん)を取(と)つてゐるね」

「いね、あれで二十四歳(じゅうよんさい)です」

「僕(ぼく)はあの二人(ふたり)ゐた若い娘(むすめ)の内(うち)、一人(ひとり)を世(せ)話(わ)するの(の)かと思(おも)つた」

「あれはいけません、うちの家(か)内(ない)の妹(いもうと)です。そうしてもうお嫁(よめ)の口(くち)が極(きま)つてゐて今(いま)此(こ)處(こ)にはをりません」

「いや、別(べつ)にそれ(その)を望(のぞ)むわけぢやないが、今(いま)のは人(ひと)の妻(さい)君(くん)ぢやないか」

「いね寡(こ)婦(ふ)さんです。今(いま)まで随(ずい)分(ぶん)カタクしてゐたのですが、もう愈(い)々(く)人(ひと)の世(せ)話(わ)にならなければならぬやうな苦(くる)しい瀬(せ)戸(こ)際(ぎは)か來(き)たのです。どうです。貴(あなた)方(た)一つ救(すく)つてやつては」

「そうさねね、まあ考(かん)へてみよう」

と其(その)夜(よ)は別(わか)れた。

六朝居(りくてい)から

その後(のち)ら白(はく)は時(とき)々(とき)々(とき)蘇(そ)州(しゅう)女(にょ)の話(わ)を持ち出(だ)す。

「少し年(とし)は行(い)つてゐますが、音(おと)無(な)しくて可(い)いのですがねね、一(いっ)遍(べん)どこか(どこ)でしんみり話(わ)をしてみて下さい。その中(うち)機(き)會(かい)を見(み)てお知(し)らせします」

雙(さう)十(じゅう)節(せつ)から十(じゅう)日(にち)ばかり過(す)ぎて白(はく)は朝(あさ)、顔(かほ)剃(そ)りに來(き)た。

「けふの午(ご)後(ご)二(に)時(じ)、是(ぜ)非(ひ)六(りく)朝(てい)居(き)で待(まち)つてゐて下さい。あの女(にょ)を連(つ)れて來(き)ますから」

「茶(ちや)館(かん)ではいけな、人(ひと)目(め)か多(おほ)くて」

「いね、知(し)らん振(ふ)りしてあすこ(こ)で逢(あ)つて外(ほか)へゆ(ゆ)くのです」

「そうか、兎(う)に角(かく)行(い)つて見(み)よう」

六朝居は貢院跡に新に出来た大きな茶館で主人は青帮の親分だといふ噂もあり。今中々繁盛してゐる。私しは約束通り午後二時、そこで待つてゐると白は黒眼鏡を掛けていやに取濟ましてやつて来た。

「今、親戚の者が来てゐて一寸抜けて出られないそうです」

「そうか、そんなら歸らふ」

「いわ、三時までには用事が済むさうです。私しがモウ一遍行つて來ますから此處で待つてゐて下さい」

奴等は時間を潰すことなど何とも思つてゐない。茶館に大勢の人が遊んでゐるが、大抵似たか寄つたかの些細の用事に利用するものらしい。

「よし、では待つてゐるから屹度連れて來るのだよ」

「わゝ大丈夫です」

と彼は慌たしく出て行つた。

私しは退窟紛れに南京名物の乾絲と白玫瑰を取つて一杯やり、菓子だの煙草だの靴下たの色々の物を蒼蠅く運んで來る小商人を追ひ除け乍ら暫く待つてゐた。午後四時頃、漸く白の姿を見た。彼は急いで來たものと見ね、額に汗がにしんでゐる。

「どうしても此處へ來るのが否やだといふので、此前きの料理屋の別室に待たせて置きました」

「そうたらう、茶館へ、しやあゝと出て來るような女なら末の見込みはない」

「いわ、南京では素人が斯ういふ處へ來て遊んでゐます」

と白は眞面目になつて辯解した。

女が待つてゐるといふ處は秦淮河畔の長發菜館だ。その一室の薄闇い部屋に茶を飲んでゐるのがそれだ。醬油色のクスンだ夾衫に同じ色の褲子を着たその體裁は先づふだん着で飛び出して來たと言ねばかりである。二人が這入つた時しよんぼり腰掛けてゐた彼女は一寸上目遣ひにこちらを見て微笑を洩し、恥しそうちにうつむいた。

「何かお菜を取らふぢやないか」

「いねもう私は澤山です。今點心を食べて来たばかりですから」

「まあいゝや、白さんと三人で一杯やらふ」

と私は自分乍ら櫛くつたいほど旦那氣取て壁に掛けてある額取の菜單子を眺めてゐる。顔拭きを持つて来たボーイは、此異様な會合を不思議さうな顔して見てゐたが、聽て四五品の菜を注文したので部屋の外へ出て行つた。白は頻りにけふの用件に就いて女に談判してゐる。女は田舎から来た客を待たせてゐるので、六時には是非とも歸へらなければならぬのです、といふ。白の考へでは、此處でゆつくり菜を食べてそれから何處か近處の宿屋へ二人を連れ込んで是非とも話を纏めて仕舞ふといふ目算らしいが、女は中々承知しない。どうも明日の晝間にして下さいな、といふ事になつた。そんなら即しに一筆書けといふ。

「そんなに急がなくとも可いよ。いつでも都合の好い時にすれば好いちやないか」

と私はそう言つたが、白は承知しない。彼は懷中から紙入を出し

「これ、此通り私は金先生から金を預かつてゐるのです」

と女に見せた。女は笑つて鉛筆を嘗め、側にあつた請客票の裏に

請先生明日午後一時至五時長安館

と認めた。そうして酒を一寸酌み交し菜を少し許り突ツつて話をしてゐた。白は先日私しと一處に貢舞台を見物し、歸りに天津菜館に立寄つて飯を食つたことなど話し、あすこの菜は不味かつたが此處の菜は旨い、などと云つてゐる。但しその晩、二人で釣魚巷を素見して歩いたことだけは話さなかつた。

女は間もなく去つた。引續き我々は二三の菜を添へて盛んに飲んだ。料理屋の三斤だから大した分量でもなかつたが、前の茶館の酒が發して来たので私は珍しく酔ふた。白も可成りの上機嫌だつたが、私しの様子を見て南洋旅館に歸すことを氣遣つたそれは蘇州人を私しに引合せたことが旅館の人達に知れると、彼自身が大に困るから

である。南洋旅館としては今まで私の藝妓買に就いて多少の収入があつたらしい。それを白が横合から奪ふことになる。白は年に二十弗の賦金を納めて南洋旅館の理髪を一手に引受けてゐるのである。それで若し此事が曝れるとお出入差留を食ふ虞れがあると思つてゐるのである。そこで彼は今夜是非長安旅館に泊れといふ。そうして明日の午後一時までそこにゐて彼女の來るのを待てといふ。恁んな話を執念くされた上、菜館の勘定をして表へ出たかと思ふと私はもうわからなくなつた。

東花園の鵝

同じ夜だ。氣がついてみると自分は、或る薄暗い部屋の紫檀細工の支那寢台の上に倒れてゐる。寢台と相對して帳場がある。ハイカラな一癖ありそうな男がブローケン英語で頻りに話し掛ける。私は起上つてその男の前の椅子に腰掛け何か答へた積りだ。私は氣味悪い此部屋から一刻も早く脱け出ようと思つて通路の方へゆく、忽

ち二三人のボーイが現はれ無理槍に私しを押し留めて仕舞つた。

「はてな、白が愈々俺を瞞したな、俺れを恁んな處へ檻禁して、どうする積りなんだらう」

と立ちなほつた時、ふと物影から現はれた男がある。それは白だつた。

「何だ、お前も此處にゐたのか、俺は置き去りにされたかと思つて怒つてゐたのだ」

「いね私しも酔拂つて此坑の上にうたた寐してゐました」

「そうか、恁んな處は否やだ、早く歸らふ」

「でも南洋旅館へ行つては都合が悪う御坐いますよ」

「そうか、そんなら何處でも可いから外へ連れてゆけ、兎に角此處は否やだ」

そこで白は立上つて私しを連れ出した。先程あの權幕であつたボーイは隅の方に張込んで黙つて見てゐた。二人は千鳥足で暗い街を夫子廟の方へ出た。

「何處へ行くのだ」

『東花園です』

文徳橋を渡つてから前きは人通の少い淋しい通りで、閉めきつた門や廣々した原や水溜りがあつたらしい。廳で空地の端れにぼつりと建つ長家の詫しい門を潜つたかと思ふと幾つもの内庭を過ぎて一室に通された。ランプが一つ卓上に置かれた外、何等の裝飾もない。私し達はその前の椅子に腰掛けて待つてゐると、間もなく十数名の女かシャツ股引といふような體裁で（實際そうではないが現在の支那女服はそのやうに簡易だ）ドヤ／＼と這入つて来て酔拂つた二人を取圍み、燕の如く囁つた。

『さあ、それでも好いのを撰むのです』

と白は宛ら縁日の買物でもするやうに私しに注意する。

『お前も一人、どうだ』

『いや、私しは家に歸ります』

一寸上海で言ふ么二の格だが、粒は皆悪い。恚ういふ場合に後の方に好い女がある

と豫ねて聞き及んでゐたので、私しは酔心地でズーと見渡すと、片隅の方に一寸可憐な顔が見わたのでスグそれに極めた。やがて女の部屋に行き、要求された四弗の銀を渡すと、白は娘嬢を片隅に呼んで何か談判してゐる。談判の結果は甚だ好くない事である。その女に故障があるから別の女と取換へて呉れといふ。そこで又外の部屋に移る。

その部屋は廣く淋しく水際に接してゐるものと見れば、枕上で鶯があ／＼と啼く。名代の女は午前二時頃まで出つ入りつして中々寐台の上に乗つて來ない。何をウロウロしてゐるのだと訊くと、粥が煮ゆるまで待つてゐるのだといふ。それでも私しの側にはにこ／＼した婆さんが一人附添ふてゐて、慰め顔に茶やら煙草やら出す。私しは一弗の小貨を渡すと

『貴方と一處に來た、あの人は悪い人ですよ』

と頻りに白の悪口を言つてゐる。恐らく白がコンミッションでも取つて行つたものと見わる。

翌朝八時頃、白は迎へに來た。此家は探花館といふ三等妓館だつた。道理で女は野性そのまゝの荒びた處があり、凡べて下等だ。

遠く城壁で取圍んだ廣場の路を二人は歩き乍ら話した。

「ゆうべ貴方は大變酔つてゐましたよ。長安旅館で斷られて大方旅社へ行つた事を御存知ですか。どうです、探花館の女は好かつたでしょう」

「馬鹿言へ、あんな下等の奴は仕様があるものか」

彼の手に預けて置いた十元の金は三元しか残つてゐなかつた。そうしてそれを往來で私しの手に渡し、

「昨日は半日しか仕事をしませんでした」

と諷する處あるような目付で私しを見る。

「よろしい、半日暇を潰させたから此三弗をお前にやらふ。併し何で七弗なんて金が要つたんだらふ。長發菜館の拂も、探花館の拂も皆俺れがしたぢやないか」

と至極殺風景に一本突込んで置く。白は何か考へてゐたが

「貴方、大方旅社で酒を飲んだことを覚えてゐますか」

「いや、ちつとも知らない」

「あそこで酒を飲み、酔ひ潰れて可成り迷惑を掛けましたから五弗やりました。それから探花館で別に二弗の祝儀をやりました。スツカリで七弗」

吹牛皮

その日は餘り勞れてゐたので蘇州人と會見を見合はせた。それから三日過ぎて白を呼びにやると、見馴れぬ中年の男が來た。白の店には彼の外、下剗の小僧一人しかゐないのに、妙な事だと思つて、老板はどうした、と訊いてみる。一週間ばかりの豫定できのふ天津に出發したといふ。彼は前からそう言つてゐた。天津に何か用事があるのです是非行きたいが、拾元の旅費が無いため出發を見合せてゐるといふ。そういふ必

要があればこそ無理に彼女を世話しようと思論だらしい。そうして私しの酔拂つた機會に乗じて七弗を胡麻化し、外に三弗の報酬を受け、合計十弗の金が手に入ったので愴愴天津に出發したらしい。間もなく白は天津から歸つて來たが、私しの處には寄り付きもしない。修面を命じると小僧をよこす。そこで私しは遂に白の店に行つた。彼は慌てた調子で

「ごうも暫く御無沙汰してをります」

「蘇州人はどうした」

「あれからスグ上海に行つて仕舞ひました。いづれ歸つて來たら、と思つてゐるのですが中々歸つて來ません」

「吹牛皮、俺れを瞞しやがつて、酷い奴だ」

「へ、そんな事はありません。何れその中何とか致します、え、けふは顔は如何ですか、おやりになりますか」

「顔剃りは外でやる。もうキサマなんか何事も頼まない」

「ごうも成行きだから致方がありません。決して嘘を吐いたわけぢやありません。天曉得、菩薩曉得です」

「假痴假呆、好い加減に胡麻化すな」

それから私しはわざと外出して髯を剃つたが不便で堪らない。で一ヶ月後には時々白を喚びにやることもある。此宿屋には白以外の理髪師を入れないから仕様がな。以前は修面二十仙、剪髮四十仙づゝ彼に與へたが、今度は修面をわざと十仙拂つて剪髮は支那風呂でやることにした。それでも白は一向平氣で前の事は忘れたような顔付で頻りにお世辭をつかつてゐる。

病める小翠芬

私しはそんなに蘇州人が氣に入つたわけではないが、白が無闇に薦めるので、素人でもあるし、多少文字も知つてゐるので、若しその女の氣質が好かつたら夫婦になつても構はない。將來支那風俗研究上幾分手助けになつたら有難いと思つて、つい氣を向けたわけだ。處が前記の通りウマ〜白に一杯食はされた。そこで宿屋に引込んでゐるとボーイは頻りに藝妓を薦める。そうしてトキ〜初物だとか何とか言つて色々な女を連れて來るが、馴れたせいだか、どうも以前から喚び付けの小翠芬が好いやうだ。彼女は今年十五歳だと言つてゐるが嘘でもなさそうだ。身體は堅に延びてゐる方で頭や手足は小さい。彼女は最初一夜十二元で通つて來たが、次回から十元に値下げしてそれからズツとその相場を保つてゐる。白の話では小翠芬の夜度資は本來八元であるが南洋旅館で毎回二元づつ儲けてゐるのだといふ。なるほどこちらが支那人なら八元でも濟むことなんだからうが、外國人に對しては何事も何割高といふのが支那の慣しである。その代り少しも因縁がつかない。けふは何の節句だから花酒を取つて呉

れどか、けふは誕生日だから碰和をやつて呉れどかいふやうな事は一月に一度か二度は必ずある筈なんだが彼女は何とも言はない。そうして靴下を買つて呉れどか、着物を買つて呉れどか、いふやうなウルサイことは決して言はない。これは宿屋に二弗の口錢があるため、ボーイは警戒して私しを彼女の妓館に連れ出させない。詰り宿屋限りの娼賣と諦めさせてゐるのである。私はそういふことを知つてゐるから、わざと一二弗或は二三弗の大小銀貨をテーブルの抽出しの中に入れて置いて濟してゐる。彼女は小錢の在場所を知つてゐて、來るとスグ抽出しの中を掻き廻し、送迎の男衆や仲居などに何程かの車賃を與へ、或は勝手に點心など注文し、残りはその小さなポケットに皆入れて仕舞ふのである。但し一弗銀貨の時には、これ下さいな、とわざと私に斷るのも田舎らしい産な所があつて可愛らしい。

小翠芬は或時部屋の内でもドしたことがある。それはコレラの流行る時分だつたら随分吃驚りしたが、なに格別のこともなく、あとはケロ〜としてどう見ても健康

體だ。酒を飲んだ様子もないのに時に依ると馬鹿にハシャいで、そこらを撥ね廻つて遊ぶかと思ふと、或時はほんやりして少しも勇氣がなく、勤めはつらいね、といふ風な様子を見せる。Tといふ支那人が嘗て彼女を喚んだ時にも同じような状態なので「近頃急がしいので睡眠不足なんです、可愛そうなもんですね」と眞面目になつて介抱したこともある。或夜例の抽出の中に一文も無かつたとき、彼女は急に萎げ返つたそうしてどう／＼本音を吹いた。

「阿片が吸いたたいから一弗頂戴な」

「阿片を吸ふ金なんかやることは出来ない」

彼女は別に言ひ争ひもせず大人しく寐た。夜中に腹が痛いと言ひ出した。そうして下腹が酷く突張つてゐる。

「阿片を吸へばスグなほるのよ」

「阿片で、此宿屋にあるのかね」

「宿屋で賣つてるわけではありませんが、此なかにあるんです」

「そうか、そんならそこへ行つて吸つて来るが可い。勘定はあした、俺れが帳場へ拂ふから」

彼女は嬉しそうな顔して起上り、衣服を着け、出て行つたが、五分間もかゝらずに戻つて来た。

「もういゝのよ」

「莫迦に早いね」

「ほんの一口、二十仙丈け吸つて来たわ。これで痛みが止まるのよ」

傲る新茶花

十二月中頃、上海からOさんが訪ねて来た。彼は一個月の豫定で南京を寫生すべくカンパス、板寸など澤山用意して来た。Oさんと言葉を交はすのは今度初めてだが、

器用な晝を描く人だとかね／＼聞いてゐた。宿屋では一寸今部屋が塞がつてゐるといふので、靴だの額縁だの假りに私しの處へ入れて置いた。Oさんはブラシテンの洋袴に駱駝毛の帽子をかぶり、濃い一の字眉を感傷的に動し、ゆふべ一睡もしなかつたと言ふ。晝飯は一處に食ふことにし、雉だの雞だの注文して彼れ此れする中、部屋が一つ開いたのでそこへ彼の荷物を移した。午前十一時頃ボーイが、又一人你的朋友が来たと言つて名刺を差出した。見ると此土地の且館主人だ。ボーイは日本人の顔さへみると、皆私し的朋友だと言つてゐるが、且館主人もけふがお初のお目通りだ。彼は宿屋の主人丈けあつて中々如才なく十年の知己のやうな調子で應對する。Oさんが上海から來てゐると聞いて

『それは恰度好い。實は貴方を秦滙へお誘ひしようと思つて來たのです。一處にOさんも連れて行かふちやありませんか』

『サアあの人はどうでしょうかね。夜汽車で疲れてゐるそうだから』

と言つてゐるところへOさんが這入つて來た。そこで兎に角三人一處に出掛けることになつた。

利涉橋を南に渡つて西に折れ、二十間ほど行つた川添ゐの或家の前に來た。軒ランブが骨ばかり残つてゐるしもた屋らしい門を這入ると又門があり、中庭を二つほど通つた奥の部屋へと導かれた。

部屋には方形の腹のくびれた彩燈を掛け、お定りの寐台や對聯のある窓外は、石欄でかこんだ小庭。その下は秦滙の水。晝舫。

向ふは金陵春といふ料理屋の裏坐敷。ガラス障子で張出した藍色の部屋が足場の上に、水際高く露はれてゐる。水枯れの秦滙も悪くないな、と見てゐると且館主人は私に對つて

『御存知でしょう。新茶花。有名な女です。今、隣の部屋が空きますから其處へ行きましよう』

〇さんは恚ういふ處は初めてだと見えて、ふさの下つた彩燈を眺め

『面白いね。支那のものは』

と感嘆してゐたか、よく見るとそれは支那向きに作つた岐阜燈であつた。やがて紅や緑の絨花で頭を飾つた小間茶くれた女の兒が出て来て、門簾を掲げて隣の部屋に案内した。

『ごうです。此暖簾は棉入れです。支那式ぢやありませんか』

と言ひ乍ら三人はその門簾を潜る。此處は今の部屋よりも少し狭いようだが、傍にオルガンなごあり。眞鍮ベットのの中には絹更紗の羽根蒲團を折り重ね、

玫瑰色の幃、深湖色の帳。

コツテリとした鴛鴦枕。

日本製の絹屏風に織り出した藤の花。

分銅形の月琴、姿見付の洋箏筥。

美人が幽思を凝らしてゐる繪。

そういふものが矢鱈に目に付く。私しは羊革張の長椅子に横たわつて仰向くと、上に裙を着けた盛装美人の引延し寫真が一枚、うつむきになつて掛つてゐる。これは恐らく此家の大あねねの肖像だらうが角力取が化粧廻しをつけたような格好である。室内裝飾、室内道具の殆んど凡べてが遊客の奉納物だそうだが、兎に角客は女の喜ぶものを買つて送る。そうしてかういふ裝飾が出来た。支那は外國品輸入のために日一日と無趣味になりゆくのである。一流藝妓の部屋ほど殊にそういふ感を深うする。こゝもその通りだ。

尙ほ又四壁には左のやうな詰らぬ對聯か書畫古董商の店頭のように何の風致もなく矢鱈に掛けてある。文句は無理に新茶花に因んだものである。

新茶花校書清品

新曲知音翻舊曲、茶香濃處勝香花

鴻城半癡贈

新茶花女史清賞

幽豔乍妝宮粉潤、澹香初透寶珠圓

慕因書

新茶花詞史賞正

深春慢試新茶譜、此身願作護花鈴

思翁題贈

辛酉小春

茶餘助我新亭話、花下撩人故國思

心史題贈

茶因舊雨饒新味、花惜殘春戀故枝

茶味濃於新熟後、花香好在半開門

その外、仇繼恒といふ落款ある細字の小額がある。仇繼恒といふ人は馬路工程局總辦で民望あり、此人から聯など貰ふと景氣が好くなるといふ。

偕て對聯の下には壁に面して細長い抽出し附の机が置かれ、その上に金枝金葉の造花がガラス壺を以て覆はれてゐる。安物の置時計、置鏡、無錫人形、香水の瓶、びなんかつら、茶壺、茶碗といふ物まで皆そこにある。

先程から此部屋に一人、寶藍色紋織の裾長の滿洲服を着た女が、立つたり坐つたりしてゐる。領には深紅の糸飾のみあつてその他に何物もない。そういふわけかも知れないが非常に長く高く見わる。今起きたばかりで多少氣持ちの悪さうな顔は、雨に打たれた花の氣分だ。からだは揚州手の可成り頑丈造りだが、目に立つほど賤しくもない。いな、その思ひ上つた顔には美人らしい威嚴さへ具へてゐる。且館主人はいふ。

『此女が新茶花です。年は二十一、けふはその誕生日で何かお祝があるそうです』
見ると机の上に半分ほど灯された紅い蠟燭が一對あつたが、相幫が來て新しいのと

刺し替へて行つた。その新しいものは人形やら花やら蝙蝠やら鳳凰やらいろ／＼の装飾がしてあつて、それが皆蠟細工で、中心の蠟燭と一處に灯る仕掛けである。そうして側には爆竹が一千發、赤紙に包まれてゐる。

『之れは皆客からの贈物です。今夜は中々急がしい。支那人は女のために惜しげなく金を遣ひます、ふだん一錢の事でも愚圖々々言ふ者が、恚ういふ場合には百二百といふ大束をバツバと投げ出します』

H館主人は聊か案内者口調で恚んな事を話す。新茶花は餘り機嫌の好くない顔でそこに立つてゐたが、やがて、着物を着換へて來ますから、などといふ事で行つた入りちがひに二人の女が這入つて來た。一人は新桂蘭と言つて十八。一人は新荷花と言つて漸く十五の子供であるがそれでも一人前ださうだ。

新桂蘭は小太りに肥つた脊の低い明るい顔の女だが美人とは言へない。此女はH館の馴染であるらしく、我々が來た時に一寸顔を見せたが、スグ何處へか行つて仕舞つ

たのは逸早くも髪を結ひかへ着物を着換へて來たのである。

彼女は茶がかつた緞子の皮襖に、黒の褲子といふ打扮で、碰和檯子の一方に坐り、茶を啜りながら

『何處からおいでなすつたの』

とH館に訊く

『上海から』

『そうだらふと思つてゐました』

と一寸さげすむやうな顔して我々の方を見た。

新荷花は白鼠のような女だ。此時水仙の咲いてゐる窓際に立つて、獨りで何かこそ／＼してゐる。Oさんはそれを覗き込み

『支那の女は深爪を取りますね』

と感心してゐる。新荷花は剪り了つた爪を頻りに噛んでゐたが、いつのまにか水仙

の前にその姿が見えなくなつた。と思ふとオルガンが鳴る。聞き覺わぬ揚州歌『打棉花』が、倦怠い旋律を一室に漂はす。側には三四人の下地ツ子が一つの胡弓を奪ひ合つてゐる。その中の一人高小金子といふ痘瘡面の兒が一番聲が好いそうで、且館はそれに胡弓を授けて唱せた。小鴨子、小猫兒といふのはお轉婆を通り越しての頑白で或は客の膝に飛び乗り或はそこらを撥ね廻つてゐる。それでも何か用事を言ひ付けると神妙に仕遂げるから妙である。一般に無作法な我儘勝手に咲いた野の花だ。それもその筈、彼等の唱ふ歌を見よ。客と藝妓と焼け死んだのを冷評したのが『南京飯店』の歌だ。薄情野郎を憎み怨むのが『四季相思』だ。二人の妻が一人の夫を奪ひ合ひ罵詈譏を極めるのが『大夫小妻』だ。彼等の精神教育は大底この程度である。外から見ると樓台があり、亭榭があり、畫舫がある秦淮も、一度その妓館の内に入ると斯の如しである。私は面白くなつたり詰らなくなつたり猫の眼のやうに感情が動揺してゐると間もなく仕度が出来たので前の彩燈の下つてゐる部屋で藝妓と一處に晝飯を食ふ

ことになつた。一體藝妓は客と一處に食事することを憚るものだが、且館は始終此處に出入りするので内輪同様に取扱はれてゐるのださうだ。だが客は客だ。そこで新桂蘭は先づ胡弓を取つて老生を唱ひ、次に新茶花は青衣を唱つた。前のは『天水關』で後のは『彩樓配』である。處が新桂蘭の時には盃を擧げてゐたので皆神妙にその唱を聽いてゐたが、新茶花の番になつた時、早くも開飯したので歌など聞いてゐず、早く飯を食へと言つたものだ。新茶花は不平らしく唱を中絶した。そうして皆山盛の飯碗を受取つた。鴉母は火鍋の中の魚丸を取つて銘々の飯の上に載せた。新茶花の飯碗にも三つほど載せられたが、三つ目の一丸が、どうした機みかコロリと落ちて彼女の胸の邊を掠めた。彼女の上衣は空色旋花模様の一尺五六元もしさうな上等の緞子で、裏は紫貂の毛皮。褲子は紫紺緞子の花模様で、孰れも仕立て卸しのキチツとしたものである。それに一點魚丸の汁が撥ねた。彼女は大に氣にしてハンケチで拭つてゐたが、聽て毛ほどの豔の引けた個所を見出したから大變だ。

『私しは御飯を食べない』

と部屋の外へ出ようとする。娘嬢や鴛母が頻りに留めてゐたが肯かない。一同興さめ

『なんだ、それッぼちの汚れは揮發油で洗へば落ちて仕舞ふ』

と言つたが中々肯かない。遂に彼女は坐を立つて行つて仕舞つた。私しは情けないほど詰らなくなり、碰和の祝儀といふことで十弗紙幣一枚置いてOさんと一處に此處を出た。

亡夫の遺志

翌日H館主人が來た。

『きのふは失禮。あすこは私しを家の者同様に思つてゐるので、餘り遠慮が無さ過ぎで困ります』

H館主人は何處から聞いて來たか、私しが支那婦人を娶つて支那家庭を作つてみたといふ希望のある事を知つてゐたので、一人適當な者を世話しようと思出た。それはH館の後の方に住む吳姓を名乗る未亡人で年は二十四歳。お袋一人、息子一人、阿媽一人都合四人暮しである。今まで親戚から月々二十弗の仕送りを受けて暮してゐたが、いつまでそうしてゐるわけにもゆかないからシツカリした人に片附きたいとの事H館主人は左のような言葉を附加へた。

『實は私しにどうだと言つて來たのですが、私は年老つてゐるし妾を置くといふわけにはゆかない。そこで若し貴方がさういふものを捜してゐるならば恰度以て來いだ。一つお世話しましょう。好んで日本人に嫁ぎたいといふのは、少しをかしいようだが亡夫は陸軍中佐で日本に留學したこともあり、非常の日本最負であつたから、日本人に再縁するのも亡夫の志を繼ぐような譯だといふ話です、第一キレイ好きで縹緞もよし屹度貴方は氣に入るでしょうよ』

「なんだか少し憐れたいような話だが、私は今無財産で繁累はなし、収入の全部を消費してゐるような始末だから女に對しても男に對しても少しも警戒する必要はない。此點は大に暢氣である。」

「フムそれは面白い、早速世話して下さい。場合に依つたら結婚しても可い」

「兎に角、寫真でも撮らせませうか」

「それよりも現物に逢つた方が早道ぢやありませんか。若し妾として養ふならば月々何程、又結婚するとしたならば、先方はどういふ條件を要求するか聞いてみて下さい。それが尤も肝要です、又こちらは月収百弗で外に何も財産が無いといふことを知らせて置いて下さい、財産があると思つて結婚してそれが無いので失望する女が多からう。ゑゝ、ようござす、一つ聞いてみましょう。いづれ私しの處か何處かでお引合せすること致しましょう」

半月ほど過ぎて私は上海にゆかなければならぬ事になつた。恰度その時日館主人

が來た。

「話は旨く行きそうです。先方ではどういふ事なら何も要求しない。無條件で結婚すると言つてゐます。だが一往親戚に相談すると言つてゐました」

私は十日ばかり上海に滞在して歸つて來ると、もう暮れの二十五日だ。そこでスグ日館に電話を掛けた。二三日経つて彼は來た。

「保證人が三人も要ると言ひ出しました」

「そうですか、一體向ふは貧乏人なんでしょう。それにこつちの保證人が要るとは妙ですな」

「いね、千元ほど家財を持つてゐます」

「そうですか、随分面倒な事をいふもんですね。だが女の身になつてみれば、千元の古道具でも大したものでしょう。宜しい、では保證人は貴方とI洋行の主人に願ふことにして、支度金は百弗といふ事で話してみても下さいませんか。それでいやなら止め

ます』

且館主人は頷いて歸つた。

血の様に濁た日

〇さんは其頃近處の鳳台旅館に引移つてゐたが、毎日出掛け歸り掛けには必ず私しの處に立ち寄つて話をする。彼は非常な勉強家で如何な寒い日でも繪の具箱抱へて出ないことはない。

『けふは手か麻れてブラシが使ひにくかつた』

といふこともあるが、明日は相變らず出て働いた。

『矢張り秦滙が一番綺麗ですね。實に色彩の豊富な點は驚くばかりです』

彼は文徳橋の方から見た文星閣を二枚、利涉橋の方から見た文星閣を一枚、それから夫子廟の牌樓を一枚描いた。彼は外へ出る度毎に何物か感激を貰して來ないことは

ない。

『日本の印象派などは無理に工夫して紫の影を作つてゐますが、此處では少しも工夫が要らない。自然その物が立派な印象派の畫です。壁の色、煉瓦の色など逆も好いものですね』

そうして、逆も好いといふ言葉を盛んに連發する。北海道後志の資財家の俸で畫が好きで東京へ飛出し、或雑誌の挿畫を描いてゐたが、ふとしたことから旅役者と懇意になり、バツクを描き乍ら舞台監督をして九州を經廻り、それから朝鮮に渡つて大連北京、天津、青島の秋冬を夏服で過ごした彼れの履歷談は非常に面白いものであつた。蒙古風が吹いて空は金色に光り、地はカラ／＼と乾いて寒く、それでゐながら太陽は血のように濁つた日、二人は秦滙の海洞春に行つて食事をした。

『けふは美しい日ちやありませんか。往來を歩いてゐる人も、車に乗つてゐる人も、皆目立たない程の金粉を浴びてゐます。これが北方だと砂塵の量が餘りに多いので、

風景など悠ツくり味つてゐる暇はありません』

〇さんは酒を多く飲まず、女も餘り近づけないが、人が酒を飲む様子や、人が女を相手にする様子を見て喜んでゐる。例へば私しが錫の酒壺を提げて老酒を注ぐ手つきが可笑しいとかいふやうな事だ。その日も私は小翠芬を喚んだ。そうして〇さんの分として王小蘭子を喚んだが、王は何か差支があるといふので來なかつた。小翠芬は茶色の男装で、黒い馬甲（外部に着る袖無し）を着け、鐐を折上げた毛皮の中折帽をかぶつて來た。彼女は藝妓に似合はぬハニカミヤで、識らぬ人を見るときやに取澄まして仕舞ひ、歌を唱へと言つても中々唱はない。だが〇さんに對しては最初から物馴れた様子であつた。それは〇さんの顔が若い優しさに富んでゐたからであらふ。〇さんは、何か歌を唱つて呉れと頻りに要求したが、翠芬は笑ひかけて首を振るのみである。〇さんは

『謝々你、謝々你』

と手を合はせたので翠芬は遂に噴き出し、ボーイから胡弓を受取つて歌を唱つた。實際この女の歌と來たらやり切れないほどマツいものだが、馴染を重ねた私しは、これを聞いてゐると新茶花の美音にも優る喜びを感じるのである。そうして〇さんも亦彼女の打ち解けた様子が好きらしくかつた。

『この女を一遍、寫生して呉れませんか』

『ゑゝやりましょう。鼻から下に特徴がありますね』

と〇さんは笑つた。

十二月二十七日上海からNといふ畫カキが訪ねて來た。彼は二三日南京を見物して漢口に向ふといふ。出來るなら蒙古の方に入つてみたいといふ。私しは此人とは初めてだつたが、〇さんは上海で既に識合ひになつてゐた。彼は〇さんと同じ鳳台旅館に泊つた。大晦日の夕方二人は私しの處に訪ねて來た。

『けふは故宮から孝陵に行つて見ました。あの大きな景色は逆も繪にするわけにはゆ

きませんね。實に何とも言へない人を壓迫する偉大な力がある』

それから三人はいろ／＼支那の話をした。私しはいつか酔ひ潰れて前後も知らず寐て仕舞つた。で二人の立去つたことも知らなかつた。夜中に目を覺まして私しは急に鳳台旅館に音訪れた。彼等は未だ起きてゐた。Nさんは支那の藝妓を見たいといふので、早速三四人の女を喚び出したが、一月一日（新曆）の午前一時過ぎだつたから遂に一人も來なかつた。老酒を買つて南京豆で飲みなほし二人の書談などを聞いた。そのうち注文してあつた馬車が來た。午前五時半。

Nさんは私しの處にステッキを置き忘れたといふので、私しは暗の路を通つて取りにゆく。四辻には巡查がポツリと黒く立つてゐる。此寒空に車夫は黄包車の中に寝てゐる。支那の車夫は膝掛けを持つてゐない。随分寒いことだらうと思つて見ると、乗りつけの者て私しを好く知つてゐる。彼はわざ／＼起き來て南洋旅館の門を叩いて呉れた。宿屋には寐すの番が長椅子の上に假寝してゐるが、外には又斯ういふ寐すの番

がある。私しはボーイに命じてステッキを捜し出し、それを持つて鳳台旅館に引返へした。

門前には既に車台が置かれてあり倉間から一頭の馬を引出してそれに附けてゐる。提灯の光はぼんやりして街は深い睡りから覺めかゝつてゐる。やがてNさんの仕度が出来たので三人一處に馬車に乗る。北極閣の下から鼓樓を抜ける頃、夜は白ら／＼明けである。亞米利加領事館附近で空が俄に闇くなつたので何かと見ると、群鳥が西から東に渡つてゐる。オレンジ色の尼寺の壁に對して竹籤が物凄く青黒く、其下に霜に打たれた野菜が痛々しくも地面に嚙ちりついてゐる。午前六時半、夜明けの廣々とした長江の岸に着いた。岳陽丸に入つてサロンで一憩みする頃、日は獅子山から昇つて、竈のような城壁の上に朱盆を掛け、上流には白く塗つた砲艦が一隻、長江の漣の上に碇を卸してゐる。

『この勢で一處に漢口までゆきませんか』

と誘はれたが、私は此廣い景色から言ひ知れの哀愁を受け、わけもわからず悲觀した。

新年(新曆)になつてからH館主人はKといふ篆刻師を連れて來た。そうして又秦淮行を勧めた。もうその時には吳未亡人の話はあやふやになつてゐた。私は氣が進まなかつたが兎に角一處に出た。六朝居で茶を飲み、H館の提議で又新茶花の家に行くことになつた。Kさんは初めて支那に來たので何もかも珍らしく、例の紅い帳の前でスケッチブックを出し、新茶花の姿など描き初めた。半分描きかけた時、女はひつたくつてそれを見た。そうしてスグ破いて仕舞つた。又例の野生の花を見るのかと情けなくなつた。新茶花はけふは機嫌がよくHさんのブックを借りて鉛筆で魚形、船形など描き、私しだつて繪が描けますよ、と自慢らしい様子であつた。

阿片の夢

Aは風邪を引いて、どうも具合が悪いと言つてゐる。

「あゝそれは阿片を飲むに限りません」

とBは勧めてゐる。聞けば一度や二度吸つた位では身體に何の害をも與へないといふ。そうして初期の中は勢力絶倫になり徹夜しても睡たくなるといふ。

「兎に角〇〇を行ふ前には之れに限りますよ。私のような老人でもこれを吸へば未だ中々若い者に負けないやうな元氣が出ます。近頃支那人はこれを利用するのが旨くなり、癮にならぬやうな方法を取つて吸つてゐます。けふ晝間飲めばあすは夜飲み、時間や日期をキツチリ合はせない。そうすれば癮にならないそうです。試めして御覽なさい。大丈夫ですから」

間もなく此家の女將が煙盆を抱へて這入つて來た。そうして寢台の中央にそれを卸した。寢台の奥には被褥を細長く摺み上げ、その上に枕を二つ並べた。女將は先づ左枕してAに右枕せよといふ。彼女は豆ランプに火を點じた。赤土色の小塊は微細な鬆

を生じてカサノゝに乾いてゐた。彼女は熱した針の尖にその小塊を着け、豆洋燈に翳すと、脂のやうに溶けたものがブツ／＼と泡を吹き、溜好な青臭い、そして妙に人を引付ける嗅を立てた。煙管は一方口で甚だ太く、末端に近い側面に蓮の台のようなのが取附けてある。そこに小孔が一つある。脂は小孔の上に盛り上げられ、中央に針を刺して氣孔を作つた。

「サアお吸ひなさい。煙は鼻から出すようにするのですよ」

と女將は煙管を指し向けた。そこでAは一息二息三息と、孔の上の阿片が全く盡きるまで吸つた。Bは茶を汲んで渡し

「どうです。具合が好いでしよう」

とAに訊ねたがAは黙つてゐた。斯くて三塊の阿片を皆吸つて起上つたAは氣のせいたが、頭が少しくら／＼した。數分間の後には小用を催した。そうして鼻孔が乾いて來た。全身の毛孔が角芽むやうに感じたが、唯それ丈けで酒を飲んだ時のやうな變

調は呈さない。

「どうです、具合は好いでしよう」

と又Bは訊いた。

「いや未だ大して感じない」

「これを三日程續けると、利き目がハッキリ現はれます」

「もう止さふ。癪になると大變だから」

とAは子供らしくおびねた。

「なあに大丈夫です。十日や一と月で癪になるわけはありません」

といふ。斯ういふ調子で知らず／＼引きずられてゆくのだな、と思つてゐる中に仕度が出来て一同酒席に着いた。Aは屢々小用に立つた。新桂蘭といふ女がAの側にすり寄つて來た。そうして膝で膝をこづいた。

「こいつ、旨を含められてゐるのだな」

とAは冷笑つたが、彼の身内に漲る慾は抑へ難ないほど旺盛になつてゐた。藝妓の不備は阿片で補ひ、料理の不備は酒で補ひ、待遇の不備は賭博で補ふ。人を釣り込む手段至れり盡くせりだと感じた時、Aは匆々此處を出た。

Aは近頃凡べての物が餘りに同じような平凡を繰返へされるので心可笑しく感じた前の一件にしる結局藝妓に落着した。今度もその通りた。Aは阿片を吸つたのでその晩亢奮して眠られなかつた。

踢毬子

Oさんは舊正月前に南京を引き上げた。私しは淋しくて堪らなくなつた。そこで小翠芬を度々喚んだ。そうして阿片が吸いたいといふ時には阿片を吸はせ、着物が欲しいといふ時には衣料を買つて與へた。阿片を吸つた後の彼女は別人のような美しさを呈した。ふだんは少し貧しい感じのする其小さな頭は阿片を吸ふと左右に著しく

開いて来て程の好い釣合となる。そうしてあの少し潤みを持った目は黒琥珀のような光を發し、瞳孔が著しく散開して来る。そうしてあの花びらのような暈は薄紅をさしたように赤く、頬は又少しまるみを持つてふくれてゐる。彼女は胡弓を取つて歌を唱ふ。ふだんとは變つて聲が澄んでゐる。そうしてあのしなやかな活潑の動作はあらゆる美人の持つ特徴を皆此處に集めてゐる。例令ば蜜柑の皮で踢毬子をやる。其小さな足は輕快に蜜柑の皮を蹶上げ蹶上げてゐる。かと思ふと人の頭の上にその皮を蹶付ける。恁んな惡戯をやるのも阿片のせいだ。

『元日には泊りがけで年始に來ますよ』

『俺れの方の年始は、どうに濟んだ。來なくつて可い』
又蜜柑の皮が頭の上に飛んで來た。

蘇州寐臺

舊曆十二月二十七日午前十時頃、一通の手紙を持つて白は來た。

『私しは嘘吐きではありません。これ御覽なさい。蘇州人が上海から歸つて來て、前の約束を果したいと言つてゐます。今日の午後三時には是非私しの家まで來て下さい。委細は此手紙に書いてある筈です』

と言つて匆匆立ち去つた。本當に支那人ほど勝手者はない。自分達の都合ばかり考へてゐると思つたが、兎に角行つてみよう。これが又どういふ風に變化するか面白いとまんなかの宛名のところを赤く染めた封筒を切つてみると、中から野引の唐紙が出た。男の代筆らしく書體はしつかりしてゐる。そうして文中、妹といふ字を一々抹殺してある。謙遜した意味なんだらう。

送呈

金雨花村先生升

碧上言

立等回音

金雨花村先生大鑒許久未晤滿懷思念恭維

起居適吉以欣爲頌敬啓者所前面叙之事宜欲

尊命不由妹從心所欲無奈家父受病日久故

此未得如願寔深抱歉之極矣也常思何時得

以暢叙今逢家父北上特修箋書披呈

見書之後望大駕速至白家理髮店

一叙爲盼所有一切要事面談奈因

年中無日難已抽身轉書前途

餘容面叙

順請

刻安

妹碧梅灯下親泐

午後三時頃、白家の小僧が来て、彼女が見わたから来て呉れと促す。私しはわざと愚圖々々して、ゆかなかつた。夕飯の時、白が又来た。

「早く来て下さい。可愛さうに晝間から来て待つてゐるのですよ」

といふので、食事を終へてから行つて見ると女は白家の裏手の部屋に待つてゐた。

「けふは是非、私しの家まで来て下さいな。此處ではお話が出来ませんから」

と前とは違つて人に媚るような様子をする。此女は小翠芬とは反對で鼻から上に

特徴がある。眉は秀で額は高く眼は優しく口は大きい。ごちらかといふと丸顔に近い

頑丈造りでぶの字に屬する方である。けれど流石は蘇州人だけあつて物腰優しく發

音は綺麗た。私しはスグ承知したので女は一足先きへ出た。

五福街の彼女の家に行くのはこれで三度目だ。けふは應接間から右の方の彼女の部

屋に通された。彼女は先きへ歸つて用意したものと見わ、眞鍮の平たい大火鉢に火が

カツカといこつてゐる。一方には家の中の家のような感じのする大きな蘇州寐臺があ

る。それには瓢箪の彫刻に大理石の腰板を嵌め、彼女の新婚時代から十數年間此寢臺に起臥したことを証するような古びた帳を垂れ下げ、赤地に水色の刺繡が夢のように上部を覆ふ。此寢台と反對の北側に窓がある。可成り高いところに設けたガラス張りであるが建附け不完全のため寒い風がスー／＼と吸き込んで来る。女はもてなし顔に長椅子の上に毛皮を敷いて私しに薦め黄銅の脚爐を脚許に置き、靴を脱げといふ。そうして窓下の、時計下の茶籠筒の下から、茶碗や小皿など出して台の上に置いた。私しは正面の對聯を眺めてゐる。

青崖二兄大人吉席 丁未四月臨川張

綠窓對酒晝調瑟 紅惠帖香夜讀書

これは彼女の新婚當時の物らしい。丁未といふと十五年前だ。その間に彼女の身邊には色んな波瀾があつたらしい。辮子をつけて父親の膝に凭れてゐる寫真や、裙を穿いた盛裝の寫真や、日本製らしい金時繪の小箱と錦手の湯壺や、ミレーの落穂の石版

晝など、凡べて過去の生活の遺留品と察せられた。側では白が例の毒の無い調子で頻りに喋つてゐる。話は皆私しの身の上だ。秦滙で豪遊を極めたこと、小翠芬に何十元かの衣類を買つてやつたこと、上海に金持の友達が數百人あつてそれが時々南京の私しの處へ遊びに来ること、三炮台の太卷きを一日一鐘吸つて仕舞ふこと、理髮代か月々四五元に上ることなど女に語つて聞かせてゐる。皆嘘ではないが三倍位の掛直がある。

『寒いから酒を飲まふぢやないか』

『ゑゝその積りで仕度させて置きました』

と曰は答へる。ランプはいやに闇に闇い。そこへウ井リヤムブレークの晝のようなグロテスクの婆さんが現はれた。額の生れ際に黒い鉢巻をしてゐる。(これは兜と言つて支那在來の婦人帽だか)二皮臉のギョロリとした目。頑丈な鼻。ぐつと一文字に結んだ口。そうしてその婆さんは私しの顔を針づけしたように見詰めてゐる。碧梅は火をい

ぢつてゐたが

『余媽媽、菜はあつたかい』

と優しく訊く。

『もう遅いから恁んな物しかありませんでしたよ』

とエナメルエナメルの岡持岡持の中から焼鴨焼鴨、皮蛋皮蛋、花生米花生米のやうな物を出していけぞんざいに卓の上に置く。脹れた綿襖綿襖の下には褌褌子が又脹れてゐる。その脹れた褌子を櫪子櫪子の上上にドツカと卸して溜息を吐く。ランプはゆら／＼と油煙を立てた。女は一向平氣で

『余媽媽、台所から藥鐘藥鐘を持つて來てお呉れ、此處のお湯はぬるいようだから』

余媽媽は容易に立たうともしないで、白に話しかけてゐる。そのうち白と何か言ひ争つて獨りぶつ／＼言ひ乍ら部屋の外へ出て行つた。

『あれは何だね』

『女中です。ごうも横着な奴で仕様がありません』

と白は答へた。處へ又一人變な男が現はれた。それは一寸烏天狗みたいな瘦せこけた顔で、肘の邊の擦り切れた黒い馬掛を着てゐる。女はそれにスグ何か言ひ付けた。間もなく余媽媽は藥籠、烏天狗は煤けた盆を持つて這入つて來た。

「何だね、その盆は」

と私は又白に訊くと、彼は親指を口に當て、貴方は好きでしようといふやうな目付で笑つた。

「それは間違つてゐる。宿屋では小翠芬が飲むのだ。誰れに聞いたね、屹度ボーイが話したんだらう、クダらぬことを言ふ奴だ」

聽て一方では酒、一方では阿片を焼き初めた。私しは碧梅に

「お前は始終これを吸ふのかね」と聞く

「いな、私しは好きません、阿片ばかりでなく煙草も酒も好きません、内では子林と余媽媽が大好きです。お母さんも身體の養ひに時々飲みます」

といふ。白は頻りに吃大煙を薦めたが、私しは遂に飲まなかつた。そこで子林は燒いて白に吸はせ、母親に吸はせ、余媽媽にも吸はせた。最後に子林は火を點じた豆洋燈と一馨を残した阿片の盆を大事さうに抱へて部屋の外へ出た。その時白はランプの側へ來て私しと一處に酒を飲んでゐたが、人の出た折を見て

「今晚は此處へお泊りなさい。女は何も要求しません、貴方の御隨意にといふ事です。金先生、私しは之れでも吹牛皮でしうか」

と白は大に笑つた。碧梅はいつしか後ろの方へ來て立つてゐた。

「何です。吹牛皮とは」

「いな私しの事なんです」

と白は又笑つた。

「へい、貴方が吹牛皮ですつて、それはまたどういふわけ」

「あの、この前貴女が約束したでしう。長安旅館の一件さ。その時私しは天津に。」

貴女は上海に行つて仕舞つたので話が中絶し、それで私しが吹牛皮だそうです。だから本来いふと貴女も吹牛皮の仲間ですね」

と白は又々笑つた。女も笑つて

「私しはあの日約束通りあすこへ行きましたが、誰れも来てゐませんでした。それから間もなく上海に病人の父を引き取りにゆくことになりましたが、その後白さんの方からも一向話がない。それで私しは今まで金先生を吹牛皮だと思つてゐました」

「ちやあ、三人とも吹牛皮だ」

と白は大に興じた。

いつしか真夜中過ぎてゐたので白は席を立ち歸仕度をした。

「今、車を言ひつけました」

「いね近いから歩いてゆきます」

「でも態々余媽々を見せにやりましたから」

白は暢氣らしく芝居歌を唱つて待つてゐたが、聽て車が來たので辭し去つた。

「不送、不送」

と言ひ乍ら碧梅は脚爐に火を入れ更へ、それを寢台の上に置き被褥をかぶせた。そうして部屋の戸を閉ぢ門を掛けた。隣ではジュウ／＼と阿片を吸ふ音が聞こゆる。

恭 喜 恭 喜

(舊曆)支那宿屋の年の暮は實に淋しいものである。二十五日頃から旅客は惶惶として故郷に引き上げ宿屋のボーイや洗濯婆まで歸省する。そういふわけで南洋旅館に大晦日まで残つてゐた客は私し一人である。八人のボーイの内残つてゐたのは麻子と黄小爺といふ男、外に帳場が一人、コックが一人、これも平生の半減である。私しは二十七日に其月の勘定して、いつもの通り茶代の外の二弗の心附けと、別に過年の祝儀として茶房に二弗、コックに一弗、別に又部屋附の麻子に二弗與へた。